万象　平成十四年十一月十三日第三種郵便物認可
令和二年八月一日発行（毎月一回一日発行）
第十九巻　第五号（通巻二二一号）

万象

BANSYO

八月号

2020. 8

八月の句

塩田夫日焼け極まり青ざめぬ

沢木欣一

沢木欣一句集『塩田』所収（昭和三十一年刊）。

掲句は、能登の風土が直に伝わる。「汐汲み三年汐撒き十年」と言われ、夏の労働の中でも特に厳しいと言われているのが塩田の労働である。

「日焼け極まり」によって塩田夫の引き締まった腕や足、真っ黒に日焼けした姿が容易に想像できる。

当時は、社会性俳句の論議が盛んに行われたが、作者は社会性と言うより「風土とそこに生きる人間の営みを深いところでとらえよう」としたものだと言う。真夏の暑さ、その過酷さが「青ざめぬ」に集約されている。

（大長文昭）

万象

BANSYO

令和二年
八月号

ある日、本がまっぴらごめんと逃げ去った、
そんな感じに見つからぬ本

歌集『どんぐり』から　大島史洋

万　象

令和２年８月号

主宰作品　菖蒲葺く……内海　良太　4
副主宰作品　定　家　葛……小林　愛子　5

風音集

……飛高隆夫・江見悦子・柳澤宗正・原田しずえ・山田春生・福島せいぎ・内藤恵子　6

続・万象と共に㊹　自　粛……内海　良太　8

同人作品

内海良太選……9

万象基金のご報告……30
同人作品の佳句……内海　良太　31
第十八回「万象」新人賞発表……32
新人賞受賞作品……編集部抄出　33
新人賞の選考経過……事　務　局　34

同人特別作品

花あんず……中條　睦子　38
桐の花……亀田やす子　39

飛高隆夫自選句鑑賞⑯

十年経て寒夜の夢に父の声……竹澤　竹里　40
この闇に山茶花の赤沈みゐる……芝宮留美子　40

福島せいぎ・内藤恵子自選句鑑賞④

打ち寄せる卯浪の芯へ投網打つ　せいぎ……望月　敏男　41
ゆるやかに巻かれて匂ふ大茅の輪　恵子……小林　珠江　41

万象ホームページ　http://www.bansyo.com

特別作品評（六月号）……沢辺たけし　43
同人作品評（六月号）……成瀬真紀子　44
万象招待席　メーデー……塗木　翠雲　46
　御所の初夏……喜多尾明子　47
万象ノオト「川」……小板橋泰山、中谷由郁、大月玲子、板垣陽子、福田弘、髙橋一夫　48
文学散歩㉜ 埼玉 童謡・唱歌の発祥地……山本　右近　50
俳書探訪……古川　京子　51
巻頭作家（七月号）プロフィール　草間三香子（東京）……内藤　恵子　52

万象作品

飛高隆夫選……53

万象作品の佳句……飛高　隆夫　68

コロナ禍の中で

生活の詩としての俳句心……松原智津子　70
新人加入で句会に活気……佐藤　雄二　70
コロナ禍の早い終息を……亀田やす子　71
新たな「座」を求めて……中村　千久　71
新型コロナウイルスには負けない……沢辺たけし　72
無音の句会……吉中　愛子　72
句会再開に向けて……榎本　文代　73
コロナウイルス禍と句会……神田美穂子　73
今だから日常吟を……中條　睦子　74
敦賀「万象」の現状……倉谷　紫龍　74
福岡の今……石原　好宏　75
コロナ禍の中で長崎の現状……丸本　祥夫　75
楽しい句会……福島せいぎ　76
マスクの顔を上げて……前田貴美子　76
俳句カレンダー掲載句自註……増田　幸子　77
同人会便り　神奈川県の同人／珈琲ぶれいく③……78
「万象」同人句会報（五月例会に替えて通信句会）……79
東西南北……82

〈表紙イラスト〉永井もりいち　〈カット・裏表紙〉佐藤雄二

菖蒲葺く

内海良太（主宰）

在五忌の水上バスの艫に立ち

野火のあと筑波の上の七つ星

荷風忌やかうもり傘を杖にして

真昼より蛙合戦千枚田

成田まで二里の脇道立葵

火の神と疫病神に菖蒲葺く

卓上にカミュの『ペスト』新茶汲む

定家葛

小林愛子
（副主宰）

少年にマスク真白き夏来る

まつすぐな青麦活けて明日は明日

日高馬鈴蘭の香に酔ひたると

風に揺れ風待ちて揺れ五月の木

麦秋の野を渡り来て墓の前

補聴器を外せし頭上はたた神

表札を捉へし定家葛かな

風音集

みどりの夜

飛高隆夫
（万象作品選者）

朝に見て昼見て夜の藤薫る
小灰蝶来たる思はぬ高さより
夜風よき五月となりぬ闇親し
風が若葉を若葉が風を冷やしをり
石楠花の山気発する町の寺
水飲みて亡き人偲ぶみどりの夜

走り梅雨

江見悦子
（編集人）

重なつて空の眩しき朴若葉
えごの花こぼれて時を刻みたり
五月憂し琉球月見草開く
スキップの少女のおさげアマリリス
遠雷や丹念に手を洗ひをる
目薬の朝の一滴走り梅雨

霜くすべ

柳澤宗正
（同人会会長）

色褪せし亡父の葉書葱坊主
足弱の妻の目聡し藤の花
立ち上る青き煙や霜くすべ
窓あけて見ゆる限りの春惜しむ
床上げの目に染むばかり樟若葉
天道虫窓に張り付き夏来る

若蘆

原田しずえ（顧問）

浮かぶたび鳰は遠くへ行きにけり
蘆牙に取り巻かれたる投網舟
沼波にただよふ落花夕兆す
若蘆に安らぎのある青さかな
色の濃し橋くぐる間の花筏
沼風に桜雄々しく枝を張る

竹の秋

福島せいぎ（顧問）

仔猫生る納屋に使はぬ乳母車
正座してそら豆を剝く男かな
東京にとどまる乙女啄木忌
ふるさとの酢の香なるべし竹の秋
おぼろなるお百度石の傾けり
春愁や教師でありしときの靴

薫風

山田春生（顧問）

春の月愛でコロナ禍の世を過ごす
戸を百歩出て武蔵野の春惜しむ
西方に富士を浮かべて夏立てり
大輪の牡丹を抱いて妻帰る
薫風や昭和も遠くなりたるよ
ひなげしや庭の散歩もよきものぞ

朝焼けの空

内藤恵子（顧問）

朝焼けの空ひとひらの雲動く
鳰の子の倒れ木の辺を潜りつぐ
野火止の流れに糠蚊湧きゐたり
鈴懸の瘤より若葉噴き出せり
落葉松の裾に仙翁つぼみあぐ
閑かなる雨の水輪や慈悲心鳥

続・万象と共に ㊹

自　　粛

内海良太

新型コロナウイルス感染の非常事態宣言は解除されたが、感染の心配が無くなったわけではなく、引き続き三密を避けながらの自粛が必要で、第二波の影響を最小限にしなければならないだろう。

句会会場の公共の施設や俳句文学館会議室は、この九月一杯までは使用不可の状態で、各地域の状況も同じことだろう。この間は通信句会、メール句会等呼び方は違うが、幹事が出句を作品集にしての選で凌ぐことになりそうだ。幹事のご苦労が続く。

俳諧からの俳句は、歴史的に「衆」の作者が一つの場に参じて句会という伝統的なやり方で、それぞれの表現を発表し合ってきた。このような伝統的な座の文芸に我々は馴染んでいるので、句会のないのは些か物足らなさを感じるがこれも仕方がない。もうしばらくの辛抱だろう。

四月、五月の同人作品では、皆さんしっかり自粛されていたようで、日常身辺に目を配ったいい作品も多かったが、やや窮屈そうな感じがした。そういう自分も家の周りからあまり離れず籠りの状態で庭の蟻の行列や、時々庭にくる蝶や、ひよどりにお世辞を言って過ごしていた次第。通常作品の半分以上は外に出て句材を得ることが多いので、約三ヵ月間の自粛は企業活動と同じく大きな痛手であった。

松尾芭蕉は外を歩くことによって自然の風物にふれ、新しい詩境を拓いていった。「東海道の一筋知らぬ者、風雅におぼつかなし」（三冊子）という芭蕉の言葉は、歩くことで「ひらめき」や「発想」を得ることが多いと教えてくれた。

正岡子規も「実景より句を得んと欲しなば、何時にても歩行くべし」と説いている。

今年はいい季節での外出自粛だったので、万象俳句賞の締切りを七月十日にした。吟行の機会を多少なりとも持って頂くために、二十日ばかり締切りを延長して作句への支援とした。多くの応募を期待している。

同人作品

内海良太選

○は佳句に選ばれました。

札幌　松原智津子

下萌えや足裏に残る草湿り
華やげる後の虚しさ花の塵
リラ並木幼き一本にも花芽
人影のなきコンコースリラの冷え
葉隠れに橡の花芽の二三寸

札幌　岡本敬子

葉が先に拡がりてえぞ山桜
千島ざくら最後に開く森の冷え
白木蓮の清浄なれば空もまた
アスパラ育て怪傑ゾロの黒マスク
手を洗ひ世を見据ゑゐて花蘭くる

札幌　濵谷和代

沢伝ひ湧水生るる立夏かな
手のつぼに艾をひとつ春深し
異国人拓きし道都のリラ香る
放牧の名馬に春のまよひ風
チセに風屋根の青蔦波打てり

札幌　大内和憲

百度石に妻となりたる人の汗

耳敏く初郭公と筆を措く
沙羅散るや空海像を浄めんと
残照の一閃奔る滝真芯
トレーラーが戦車積みゆく青嵐

札幌　大内マキ子

漆黒の和牛の肩に新樹光
水に映え雲を跨ぎて水馬
夏の牧放馬いよいよ漆黒に
沙羅の花翳りて白の極まれり
岩清水日の斑もろとも掬ひ飲む

札幌　落合裕子

限らるる外出白き蝶に会ふ
要請と自粛の日日や花は葉に
リラ冷えや青き明かりのテレビ塔
蕗を茹で山の匂の湯を零す
湯上りのアイスクリーム一日暮る

江別　佐藤哲

地吹雪は刃を研ぐごとし原野走る
ぎしぎしと家きしむとき狐鳴く
少年のまなこまぶしや鳥曇

四島(しま)遠し千島桜の咲きほこる
大判のマスクで会釈新社員

苫小牧　林陽子

こつちへと誘ふ鶯藪の奥
稚魚躍る石斑魚の水のあたたかし
子の網に群れを解かるる八目の子
はしどいの待針ほどの芽の紅き
長閑さや海岸までの一万歩
○雪渓や二羽の白鳥翔るごと

秋田　小松敏郎

春暁の斧のひびきや杣の村
母の日の母亡き孫の長電話
春愁や農夫の高き喉仏
切株の斧あと深く春光る
水門を溢れたかぶる雪解川

新潟　佐藤雄二

老鶯の舌打ちをして終りけり
白絣着てよそゆきの貌となる
○囀りの遠のき紅茶冷めゐたり
県境に雑貨屋古りし初燕

音もなく畝廻りゆく牡丹寺
胸中に企みひとつサングラス

新潟　髙橋ひろ

抱つこしてもうすぐ一つ子供の日
棕櫚の花散り骨ばつてしまひけり
台風の一号去りて新樹冷ゆ
思ひつつバラ剪らざりし夜の雨
薄曇して石鹸玉力無し

南魚沼　森山暁湖

若葉冷え禅僧諭す只管打座
しらじらと葱の擬宝(ぎぼ)より明けにけり
○老いてなほ畑打つ腰の盤石に
春雷や谷川岳にはじまれる
なめくぢり左右の角のよく動く

益子　光岡れい子

花林檎うす紅かをる夕まぐれ
○人声に子持ち目高の速さかな
白詰草のよつ葉いつつ葉みつけたり
皮を脱ぎたるたかんなの吾が背丈
葺きあげし紺屋の屋根や柿若葉

芳賀　大村かし子

両岸の堤明るき八重桜
○春の雷二つに割れて雲の中
靴下をきらふ幼児や夏来る
走り茶を一声かけて供へけり
母の日の花に囲まれ自粛かな

芳賀　見目トキ子

閑古鳥朝な夕なの神の杜
水撒けば土もよろこび吸ひ込めり
晩春の畦に鍬寝せ帰りけり
○農継ぐと決めて田植機試運転
リハビリの靴新しく青き踏む

宇都宮　阿久津勝利

マスク縫ふ足踏みミシン若葉冷
○夏めくや背に水吹く象の鼻
眠さうに曲がる都電や目借時
海神へ朱の橋二つ大干潟
空海の植ゑし桜の支へ棒

栃木　上岡佳子

雉子二声父の忌日の帰りしな

葉隠れの太る実梅の在りどころ
下野の植田の中や古墳群
悠久の風聴く塚や遠郭公
弟の逝きて七年鮎の川

佐野　亀田やす子

さくらんぼ夫婦で担ぐ長梯子
朝日子や伏す芍薬に掌を濡らす
樟若葉嬰児の足のさくら色
産院の窓明るくす山法師
まつすぐに宙へするする上る蜘蛛

佐野　増田幸子

春キャベツぱりつとはがし朝来たる
雲に乗りたやゆりの木の花見たや
じつとして光る雨粒蓮浮葉
葭切や渡船場閉ざす錆チェーン
さきがけて黄色ばかりの菖蒲園

佐野　駒形祐右子

退院や厨の隅に芽玉葱
空腹にして満腹の鯉のぼり
牡丹の花の重さに耐へきれず
若葉風窓辺清かに歯科の椅子
乾かして又潜りたる川鵜かな

佐野　加藤季代

一雨あり青梅の実の重さ増し
夾竹桃つつけんどんに枝伸ばし
遠雷や修正テープ千切れたる
夏蝶の影さだまらず苔の磴
花は葉に周平の徒士いさぎよし

佐野　鍋島広子

川風に煽られてゐし揚ひばり
利根川のゆるき流れや揚ひばり
利根川の残照まぶし夕つばめ
仰向きに眠る幸せ薄暑光
○菓子箱に巣燕守る喫茶店

佐野　阿部澄

○蜘蛛の子の一直線にとぶ速さ
青芝を啄む椋鳥の朝忙し
芍薬を剪り急ぎたる雨催
水まくやふり返りつつ蜥蜴逃ぐ
風折の矢車草の紺褪せず

佐野　芝宮留美子

山峡の芽吹きの遅き棗かな
雉子啼くまだ水張らぬ棚田かな
咲き満つる桜に母の逝きたまふ
茶毘を待ち開けはなつ窓桜時
大手鞠落つる一花やまりのまま

佐野　島田和枝

鳥帰るダム湖を高く一巡り
九十九折る坂の天辺懸藤
川に沿ふ花アカシアや雨烟る
奥座敷五月の風へ開け放つ
麓まで現るる遠富士山夏に入る

佐野　茂木弘子

蟲天に光ありけり揚雲雀
古墳みち少し外れて蕨摘む
すかんぽを噛み噛み上る古墳塚
下野の古墳に咲けり母子草
咲き満ちて蜜柑の花の家となる

足利　大木茂

蟇つるむ円空仏の貌をして
新聞にチラシ無き朝夏立てり
かはほりの一番星を飛び交はす
○ばら園の薔薇の真ん中鉄の椅子
夏柳中洲に太き根を絡め

土浦　澤照枝

田を植ゑてまばゆくなりし筑波道
麦秋の汽笛近くや真岡線
葭切の鳴き継ぐ浦の手こぎ舟
青蘆の中の棄て船屋号見ゆ
休園の貼り紙破れ牡丹園

さいたま　山本右近

はつ夏の肘とがらせてピアノ弾く
人失せて新樹がくれの銀座の灯
風五月鍾馗を据うる茶屋の屋根
ボルト錆びし砲台跡や大南風
○卯波立ち星座のごとき島灯り

志木　中村千久

廃屋の空がらんどう松の芯
木造の教会堂に薔薇の門
開きたる句帖若葉の色に染む

影となり光となりて初つばめ
日の落ちて風立つころや花ふくべ

所沢　三好かほる

くさぐさの花にしばらく揚羽蝶
鯛の子と蕗の青煮や二人の飾
閉ざしたる門明るうす花うばら
母の日の薔薇届きたりピンク色
朝顔の苗に夕べの雨荒し

所沢　森岡恵子

土を割るものの芽の青さやかなる
○空蒼し木々は芽吹くに任せたり
春の雪光る雫となりにけり
秩父嶺の雲を染めあぐ春夕焼
いねがての真夜の静けさ春深む

所沢　南雲秀子

桐咲いて狭山湖の水光りあふ
野火止の麦畑の風黄金色
トンネルを抜けて秩父の山滴る
新緑の渓にぎやかに舟下る
山藤のゆらぎて武甲嶺きはだてり

入間　山口素基

遠嶺より天二上の花吹雪
白蝶のとまりしものに女郎墓
捏鉢を看板にしてさくら餅
霊峰に幻の瀧現る
魚とて翅あらば飛ぶ夏初め

千葉　田中道江

朝つばめ伊八の波をかすめけり
逝きしとや白君子蘭咲く朝
カーテンを開くあかるさ君子蘭
名木と聞きし藤房短かかり
歩道橋撤去の空へ夏来る

酒々井　竹澤竹里

さくらんぼ花の数だけ小粒なり
小判草列車過ぐればシャラシャラと
薔薇園に観る人もなく散りはじむ
蒼天にくれなゐの薔薇溜息す
桑の木に毛虫のやうな実の熟るる

酒々井　中嶋久登

てふてふの吹き上げられし畑の風

桑解くや溢れて速し用水路
揚雲雀歩荷の背負子綱固し
潜戸に唐傘立てて白牡丹
鴉来て瓦に潜む雀の子

佐倉　内海保子

桐の花火の見櫓の残る村
田水引くポンプ小屋にも春灯
傘雨忌や句碑の細文字蚊のごとし
灯台の崖の真下の花いばら
ほととぎす鳴くや田水をひびかせて

佐倉　大内佐奈枝

古墳より四方へ伸びたり春田道
鉢の土広げ干したる日永かな
押しずしの笹青々と穀雨かな
磯畑に拾ひし貝や豆の花
新樹燃ゆ自粛制限解けぬまま

佐倉　三屋英俊

サンダルの歪む踵や薄暑来る
さくさくと枝刈り込むも夏はじめ
○水撒けば飛び散る虹のかけらかな
蚕豆の莢のダンベル握り締む
下闇やむじな毛を噛む蕪村句碑

佐倉　横川良子

粛々と暮し見直し春惜しむ
海近き改札口に燕の子
巣籠りに朝のルーティン若楓
涙目のベランダ泳ぐ鯉幟
バス停の際まで街のキャベツ畑

四街道　奥太雅

春筍を山積み爺の猫車
里山の裾縫ふ小道濃山吹
遠近に雉鳴く谷津の散歩道
余つ程のことがなければ飛ばぬ雉
雀の帷子引けば地球の持上る

四街道　塗木翠雲

大楠の幹の湿りや菜種梅雨
春惜しむ湖畔に椅子を二つ置き
休校の校門囲む躑躅垣
見晴るかす富士を向うに梨の花
○山藤の上に山藤色重ね

船橋　山下良江

刈残る波間の鹿尾菜黒々と
天井まで蓋届きさう鹿尾菜蒸す
芝生の芽つつく椋鳥日もすがら
引きこもる窓へこまやか春の雨
草引けばこんな処に蕗若葉

船橋　大山春江

束の間の紫の風藤香る
何時の間に杉菜の丘となりゐたる
このあたり昔は海や緑立つ
芥子坊主ぶつきらぼうに林立す
音もなく揺るる小判草のかるさかな

船橋　赤堀洋子

緑摘む脚立そのまま雨やどり
巣造りの鴉枝折る首回し
春疾風ハンカチの花空を飛ぶ
川音に吸はるるごとく柳絮飛ぶ
声いくつすがたの見えぬ枝蛙

船橋　久保村淑子

綿菓子を立てたるごとし山桜
放し飼ひの矮鶏に追はるる入園児
コロナ禍の暦通りの梨受粉
川口を波逆上る立夏かな
クローバーに寝転ぶ二人海青し

船橋　片桐帆一

○北窓を開ければ六輛電車行く
裾につく土筆の粉の青きこと
聖五月白雲木の並木道
からつぽの街の大空桐の花
がらんどの駅のピアノにカーネーション

船橋　宮本加津代

雨粒の雅びに藤の花揺らす
特攻を偲ぶ知覧や新茶買ふ
籠り居の老にやさしき菖蒲風呂
足元の風は紫諸葛菜
ふと気配竹の皮脱ぐ音なりし

柏　山本とく江

コロナ禍や剪り捨てられし藤の花
大牡丹崩して昨夜の雨上がる
今日もまた訃報重なり冷奴

茉莉花や憂ひ顔なるマリア像
蛇の衣吹かれ碑のみの川関所

柏　内田郁代

紅色にすかんぽ芽吹き野の更紗
夏めくや籠りし夫の散髪す
土手草に抱卵したる大白鳥
揚雲雀雲の中より声落す
ことごとく祭りは失せてしまひけり

柏　古川京子

しやぼん玉野外ステージより湧けり
畦を行くフランス帰りの春着の子
研究室に布団をのべて春休み
あげひばり水田の空を離れざる
葭切や墓所に丹色の大明神

流山　沢辺たけし

手探りで真つすぐ植うる蓮根かな
○空門に入れば椿の花匂ふ
燕飛ぶ添うて別れてまた添うて
街を避け出会ひを避けて春愁ふ
田植機の植ゑ残したる白き雲

流山　穂苅照子

春雷や本に微かな煙草の香
○一度だけ浦島草は糸投げる
行く春やまだあたたかき犬の骨
犬逝きてたんぽぽの絮しきりなる
庭師また石置き直す遅日かな
揺らぎつつ太き香となる藤の花

浦安　田中幹也

白日の風に浮き立つ花菖蒲
朽舟に寄する夕波蘆若葉
鉄線のひと花触るる野の仏
ひなげしや鐘の余韻の裏通り
石楠花や童女とのみの隅の墓

東京　谷田部栄

背番号貰ひし少年夏来たる
○すんなりと決まりし会議水羊羹
朝顔の綾子の紺にひらきけり
竹林のかすかなそよぎ更衣
花桐や峠越ゆれば会津領

東京　須賀允子

雛罌粟のゆるる晶子の生家跡
との曇る空を支へて桐の花
中庭に干さる藍染柿若葉
黒揚羽竜のうねりの石畳
鬼薇長けて毛虫に喰はれけり

川端竜子邸二句

東京　降幡加代子

遊歩道の右も左も新樹光
参道を行き交ふ人の皆マスク
参道の小流れに散る夏落葉
今朝の夏山手線の走る音
出口見えなにやらほつと新茶くむ

コロナ禍

東京　名和政代

六月や糠の溢るる精米所
青時雨今日庵の明り取り
買物は生協まかせ蟬の声
休診に続く休診アマリリス
朝の日にビルの谷間の白つつじ

東京　山本絢子

春深む内灘讃美の靖の碑
新緑の森の奥よりハーモニカ
万緑を映す池の辺ガンジー像
吉良さまの寺に五つの鯉のぼり
子と歩く哲学の森春うらら

東京　藤田裕子

屋上に野遊びめきてお重箱
コロナ禍の町に片脚春の虹
まくなぎのかたまり畦に迫りくる
蔦青し窟にルルドのマリア像
老桜の幹に脂吹く梅雨じめり

東京　赤松郁代

山葵田をくぐり来し水光り合ふ
○お座りの犬傍らに蓬摘む
花嫁ロードばらの花弁撒きてより
花栗のひもの裾より蜂潜る
天道虫のぼりつめては飛び立てり

東京　島野ひさ

やはらかき雨に明けたりみどりの日
行々子風止むときに声とどく
ゆつくりと流るる夏の雲の白

大仏の横顔清し樟若葉
夫の墓手作りマスクとよもぎ餅

東京　佐藤晴子

金盞花日照雨に金を放ちけり
翡翠の一閃映ゆるはけの水
伸びやかなブロンズの腕風光る
母在りし日の如庭の白牡丹
藤白し父の遺筆の墨滲む

東京　加賀葉子

水盤や八ツ頭の茎弧をゑがき
宵の口菖蒲湯の香を持て余す
三方へ五月の菫種飛ばし
花は実に広き更地の屋敷神
夕づくやのの字のの字の軒忍

東京　久留島規子

ビフテキに天城のおろし山葵添へ
掌にぽんと打ちたる山椒の芽
○笹の香や粽くるくる解くとき
朝の窓五月の風に開け放つ
登校日アンネの薔薇の耀へり

東京　下嶽孝一

ビル光り柳青める日比谷濠
浅間嶺の裾を華やぐ桃の花
新樹光髪に眩しきティアラ来る
薄くれなゐ空に浮きたる花水木
紺柄に替へし座蒲団夏はじめ

東京　杉浦一子

静けさを一人占めする余花の寺
ゆりの木の空はキャンバス花ひらく
緋牡丹に人の集まる真昼どき
青葉木菟声を近くに昼の闇
菖蒲湯の青き匂ひに身を沈め

小平　吉村光子

ほつほつと咲く片栗の群生地
蕾こそ佳けれむらさき木蓮は
レッドウッド洞の火の跡冴返る
レッドウッドに長き青春新芽吹く
大手毬緑の珠を一列に

立川　疋田華子

富士山の見えぬ一日の初燕

這ひ這ひの枝垂桜の傘の中
二発目は少し小ぶりや春の雷
きりもなく水浴ぶ鴉今朝の夏
牡丹の匂ひ放ちて崩れけり

町田　吉中愛子

四肢張つて蛙雄なり石の上
森に一人五月三日の風浴ぶる
聞き慣れし燕よつばめ戸を開くる
ストライプのシャツの濃紺今朝の夏
風薫る初めて使ふ杖の色

町田　広瀬俊雄

塊りて風にあらがふ花蘇芳
不如帰一声高く雲の中
秘事あらば螢袋に閉ぢこめよ
そこかしこ休耕田の昼蛙
アカシアの花の盛りや梓川

町田　桔梗純

日溜りの草に蜥蜴の動かざる
若楓その明るさに目覚めけり
休校の花壇埋むる姫女菀
門に置く鉢に開くや杜若
耶馬渓のはちみつ届く薄暑かな

日野　喜多尾明子

囀や草食みどほし蒙古野馬
石楠花は咲きくたびれてとの曇り
寺に飼ふ緋目高の腹太りたる
豆飯や聞こえぬままに頷きて
青臭きトマトの腋芽雨催ひ

青梅　小林珠江

初幟上ぐる掛け矢を弾ませて
里山は川に展けて麦の秋
若葉風クラリネットを吹く少年
鎌を研ぐ水に散り込む花卯木
水音や揺らぎどほしの花山葵

横浜　榎本文代

竹皮に包むおむすび八重桜
どの部屋も片付かぬまま若葉風
○白薔薇に真昼の翳の深まりぬ
今日よりは夏蝶となり屋根越ゆる
休校やなんぢやもんぢやの咲き満ちて

母の日をひとり煎餅かじりゐる

横浜　西本才子

巣燕の顔出す島の饅頭屋
桜蝦干す波音のひびく路地
集魚燈まぶしく発てる烏賊釣舟
山へ向き父と子吹ける石鹸玉
すういすいと藻を除け進むあめんぼう

横浜　川越昭子

窓開き百花繚乱みどりの日
加湿器の湯気立つ八十八夜かな
うぐひすの声と重なる神の鈴
満開のりんごの花に授粉せり
旧友の訃報八十八夜かな

横浜　大橋雅子

蜷育つ小川や芥除く人
洋館のフェンス一面木香薔薇
箱根空木落石注意の崖に咲き
坐り込む犬をなだむる日傘かな
三十度の気温目まひの五月かな

横浜　山崎郁子

幼友と手話で汲みたる新茶かな
氏康の寄進の社栗の花
馬鈴薯の芽吹きに昼の鐘鳴れり
春キャベツ太き根を切り手渡され
背負ふ荷に春の雪積む尊徳像

横浜　田賀楳恵

若葉風標は仮名の旧字体
○風さやか弾みどほしの手鞠花
紫陽花の藍より蒼し小糠雨
葉隠れに窮屈さうにゆすらうめ
ひと日雨土の匂ひのすひかづら

川崎　山口千代子

八重山の島々に立つ雲の峰
島歌の水牛車ゆく夏の浜
星砂の小瓶売りゐる片蔭に
平凡なひと日過ぎゆく冷奴
吊橋を揺らして来たる夏帽子

川崎　新妻奎子

春菊の灰汁吹きこぼし家ごもり

まるき手の合掌園児の聖霊会
アイスクリン嘗めて横浜馬車道を
葉桜や国訛聞き心地良し
囀りの高まりし後暮れにけり

川崎　大久保　進

柳絮飛ぶめくれば白き予定表
○桃咲くや妻に聞かせる綾子の句
飛花落花あまねく空の青さかな
蓄への鯖缶開くる昭和の日
菖蒲湯の膝の瘡蓋痒かゆし

鎌倉　恒川清爾

春燈や潮せまりくる島の宿
囀を抱へて大きご神木
○やくわんよりお替り貰ふ甘茶寺
離れより洩るる春の灯婚の客
阿夫利嶺へ煌めく代田万華鏡

横須賀　織田みさゑ

○五月晴どこへも行かぬ父の靴
老鶯や戦なき世を今日も鳴き
新茶汲み長寿を祝ひ一人笑む
此の里に老いて悔なき石蕗の花
羽搏きを忘れてゐたる春の鴨

茅ヶ崎　三澤治子

飛花落花みんな自分に来るやうな
人消えて音消えて花降り止まず
あいさつの髪に花びら三つ四つ
春潮や鑑真和上上陸地
マスク作り千人針を思ひ出す

伊勢原　佐藤和子

笹粽結ふ板の間の黒光り
地図になき細きながれや踊子草
雨上がる其角の墓に棕櫚の花
一枚のハガキを出しに更衣
那須といふ大緑蔭の中通る

秦野　佐藤嘉洋

やはらかき蕊降らしたる八重桜
剝落の阿弥陀座像や花きぶし
万年の地層抱ふる春の谷
黒ぐろと蝌蚪のかたまる地震の湖
大山の夕茜して代田道

松本　中條今日子

雪嶺の遠くに見ゆる桃の花
生き生きと生まるるごとき落椿
馬小屋の眠れる馬に囀れり
消えさうで消えず燻る畦火かな
鶯のひつそりと鳴く裏の山

富士　神田美穂子

甲斐を出て駿河の海へ雪解川
朧月工場夜景の空高く
青空に富士立つ日和青き踏む
野火走る真白き富士へ焔あげ
時の疫も花粉症もマスクかな

静岡　大村峰子

掌の柳絮空へと戻しけり
○青鳩や小屋に転がる一升瓶
木洩れ日に鎌首擡げ蝮蛇草
鬼の子を蟻一匹が運びをり
トタン屋根打つ青梅の硬き音

静岡　海野みち子

三年振り燕のこぼす藁の屑
牡丹咲く母の好みの臙脂色
芍薬の花に亡き夫重ねをり
つくしんぼ湖風渡る比翼句碑
獲物曳く蟻三匹の足揃ふ

静岡　宮﨑知恵美

蕗味噌に久女の恋を思ふなり
あんま機に寝てゐる夫や花疲れ
連翹の空摑まんと伸びてをり
鶯や焼きたてのパン届きたる
校庭に渦を巻きたる花の屑

静岡　長島操

無住寺となりて七年紅枝垂
彼岸西風墓に元気を告げにけり
鶯や村の高みの墓所
啓蟄や眼底治療の薬沁む
菩提寺の廻廊に触れ糸桜

静岡　岩﨑武士

鍼力屋の鍼力打つ音夏来る
山車曲がる城下に残る札の辻
袋掛風のそよぎを包みたり

覗かれてちりぢりになる目高かな
疫病や校舎からつぼ四月尽

静岡　曽根　満

デパートに妻見失ふ四月馬鹿
岩伝ふ水のたまりの蝌蚪の国
沼底へ子らを遁がるる柳鮠
赤石岳の風に刺さるる蕨狩
杉の花飛べり幕府の御林より

静岡　藤原千代子

沢音の響きに蕾む花筏
鳥の絵の切手の封書啄木忌
花冷や履くあての無き靴磨く
ランドセルに新の教科書花は葉に
コンクリートの四角棲処に蟇

静岡　荻野加壽子

封鎖なき天へ雲雀ののぼりゆく
即興のジャズのスウィング夏に入る
曖昧なものに記憶や豆の飯
極彩色の茸の図鑑修司の忌
いつの世に殻捨てたるかなめくぢり

静岡　小川明美

ティーショット池に飛び込み亀鳴けり
西行忌後生車の重かりき
句会場は公望の居間風光る
○空襲に焦げし樟芽吹きたり
謝肉祭参道に買ふハンバーガー

静岡　藤本節子

母の家住まず壊さず春惜しむ
ゆつたりと風に応ふる白牡丹
うまごやし雀が沈み子が跳ねて
夏めくやスケボーの子の宙返り
浸食の迫る砂浜啄木忌

静岡　大長文昭

○のぼり鮎落合ふ淵に黒く群れ
畑打のをんな豊けし里言葉
出水川中洲つぎつぎ砂崩れ
寿桂尼の墓へ青草膝で分く
九体仏の端に吾立ち亀鳴けり

静岡　加山ひさ子

雨の打つ砂場のシャベル啄木忌

目刺食ぶ提灯ともるガード下
入学を告ぐる背丈のまた伸びて
葉桜に騒立つ鳥や鑑真忌
のろのろと犬立ち上がり春終る

静岡　吉野美智子

竹秋や村の茶工場閉ざさるる
船上に掬ふや濠の春落葉
戸袋に巣立間近の鳧騒ぐ
今も取る朝日新聞啄木忌
新聞の記事の重たき四月尽

静岡　石川裕子

作業場の音の絶えたり雨蛙
子に持たす子の実印や五月来る
ローマ字の標札薔薇のアーチかな
螺旋階段上り詰めたり時計草
短冊を富士の句に替へ更衣

静岡　望月敏男

○啓蟄やバッグの中の電話鳴る
もう一度物干し竿の黄砂拭く
啓蟄や古墳の主の深眠り
武家門に緑青の鋲風光る
嘴の蛙の足が空を蹴る

富山　若島久清

朝採りの茎立藁で括りあり
筍のごろりと寺の勝手口
昼市の千光寺に聞く閑古鳥
瞑想の大仏さんにみどりさす
貸農園こまごま区切り瓜這はす

射水　成瀬真紀子

筆折りしはぎ女の町や菫草
花文字の市の名ふくらむチューリップ
ステイホーム旅は紙上に花は葉に
早乙女や禰宜の鎮めし田の光り
早乙女の少女に戻るにぎやかに

金沢　岸川素粒子

陽炎や野は風葬の記憶持つ
古事の積もる大和や遠霞
○うららけし牛の消えたる十牛図
涅槃西風人には消せぬ原子の火
歯切れよき明の雷鳴晢子の忌

金沢　田村愛子

犀星の母校名失せて桜葉に
花冷やほぐす首こり肩のこり
母の日の母の遺影へありがたう
男来てわさび田の水すくひ呑む
能登詠みの師を恋ひゐるや百千鳥

金沢　井村和子

測量の三脚かかへ青き踏む
御衣黄てふ花うすみどり杜閑か
蛇穴を出て飛石に畏まる
大徳利八重山吹を無雑作に
ぽつねんと鍵盤たたく春愁

金沢　中條睦子

蝶の昼はらふ机のうす埃
夏茱萸の一粒沈む手水鉢
梅は実に盛り塩少し傾きぬ
搦手門からたちの花匂ひたり
筧落つ水はそのまま早苗田へ

金沢　今越みち子

ふけるなよ師の句草餅食ぶるたび
水色のはるか加賀富士聖五月
年毎に着丈を詰めて更衣
暮六つや未だやめらねぬ草むしり
若葉風補助輪取れて得意顔

金沢　伊川玉子

一笑塚くわりん芽吹きの雨来たる
濯ぎたる法衣一竿初蛙
花大根海に出る道真つ直ぐに
桜実にポンプ井残る小学校
アカシアのこの道が好き母を連れ

金沢　伊藤美音子

逢ひたくて辛夷の山を来たりしと
病棟に出張床屋日の永き
○畦締の掛矢の音や鳥曇
連翹や夫に歩幅をあはせたり
山藤の大蛇めく幹生々し
花は葉に予期せぬ事の続きけり

金沢　高田たみ子

○読み返す「万象」俳誌春遅々と
天辺へ上り詰めたる藤の花

師の墓を染むる夕日や聖五月
一文字に蛇身じろがず河川敷
熊の檻仕掛け鎮もる山若葉

金沢　後藤桂子

地を掴む松の走り根縞蜥蜴
囀や鏡花名付けし五本松
散居村水の寝息の代田かな
読みさしのリルケ集繰る薔薇の風
茄子苗を植うる尼僧の独り言

金沢　豊田高子

夜の新樹シテなうなうと橋掛り
窯出しの貫乳の音夏立てり
麦秋や越の白嶺の模糊として
○飛魚の群れ白波を逆立てて
火襷の走る大甕朴の花
酒船石へきりもみのごと笹散れり

金沢　松井佐枝子

○逃水や鉄板道路ありし町
蜜蜂の蕊のめり込む真逆さま
水亭の竜宮のやう陽炎へり
ジャム瓶の煮沸ぽこぽこ立夏かな
潮入の弁慶のごと卯波立つ

金沢　石川純子

楊貴妃てふ桜を愛づる頬に風
風のまま池をふちどる花筏
踏み迷ふ桜蕊降る桂坂
藤の花空はなやぎて地を染めて
チェンソーの山気ふるはす夏初め

金沢　河野尚子

白雲の湧きたつ能登路夏燕
休耕田小さき花野と変はりけり
山吹を揺らして止まる園児バス
母の日に届く石鹸薔薇匂ふ
玄関先炎のごとく躑躅咲く

内灘　塩井志津

ほころぶや総身苔むす老桜
町と町つなぐ二里余の花街道
菱櫓の濠に吹き寄る落花かな
町医者の三代つづき燕の巣
唐門も碑もかげろへる古園かな

七尾　谷渡末枝

空よりも海の色濃しこどもの日
古稀の顔晒して仕切る大田植
○新茶の香機を織る日も織らぬ日も
牡丹や女優の名前出てこない
一番星筍飯の炊きあがる

敦賀　石田野武男

屠り場へ牛曳かれゆく麦の秋
○夏潮の攻めこんで来る岬村
伊勢の巫女五尺の髪を洗ひけり
全長を水面へ投げて蛇泳ぐ
南京軍鶏小屋に騒ぎて山開
啞蟬や蘭医の墓の丸き肩

敦賀　倉谷紫龍

冴返る身の奥さぐる内視鏡
貝寄風の荒ぶ廃炉の岬かな
田螺とるおとがひ泥にまみれけり
洋風の船主やかたや百千鳥
かたかごの揺れ義仲の燧城

敦賀　倉谷ます美

重盛の塔婆の普請つばめとぶ
片栗の花討死の碑へひらく
貝寄風や往診の船島目指す
手折るたび蓬芯より香りけり
渦迫る観潮の船ぐらりとす

敦賀　靏田勝子

鳥巣立つ由良川に沿ふ明智籔
湖昏れて波の秀を抱く春の鴨
大歩危の谷のぞきゐる遍路笠
生簀もつ宿や花鳥賊美食とす
海猫渡る翁たどりし荒磯みち

徳島　福島吉美

掃きあとの筋目に残る松の花
強飯に鮎添へ祝ふ誕生日
師を訪へば目高の水を換へてゐし
若菜寺天井の絵に桃太郎
山寺へ難所の峠柳絮飛ぶ

徳島　村上和義

みどり児の乳房を離すめかり時

緑蔭の寺に遺りし血天井
青梅や寺に庚午の屠腹の碑
一本の手折りし薔薇に百の棘
闘牛の勢子の大声島の夏

徳島　宮西修一

新緑を飲み込んでゐる池の鯉
対岸は国生みの島卯浪立つ
○卯浪立つ向う紀の国磯馴れ松
母の日や楽しかりしと逝きし母
柏餅のつるりと剝けば母恋し

室戸　安岡みさき

白靴を履くこともなく古稀を過ぐ
目高群れ我ら団塊世代なり
鯨岩呑んで卯波の裏返る
滴りを享けて拝む修行窟
○天気図の台風一号五重丸
落ちさうな崖の地蔵やほととぎす

長崎　丸本祥夫

唖蟬を捕らへば全身脈打てり
かき氷濡れしお釣りをもらひたる
風となり濠越えて行く合歓の花
浮き苗の長き根の先浮かびをり
父の忌やねずみ花火の瞬く間

那覇　前田貴美子

雨音に沈みて春も終りけり
桑の実摘む市営団地の中庭に
ででむしに海の記憶のうすみどり
黒南風やバリケン荒き息づかひ
梅雨蝶の恋海色の翅ひらく

那覇　大湾宗弘

がらがらのバスをつらねて夏来る
花びらが透けて裏にはかたつむり
雨しとど塀に傾ぎぬ青芭蕉
雨音のばらばらばらと芭蕉林
闘魚美しその勝敗の一瞬に

那覇　比嘉半升

梅雨の蝶海漂林の闇へ消ゆ
村井戸の草に高鳴く雨蛙
小満の御嶽や祝女の束ね髪
月桃の花にゆふべの雨の粒

夏雲の影を流せり忘れ潮　那覇　當間シズ

花福木降り継ぐ道の尽きて海
走り梅雨山羊の親子の岩庇
白玉や友は実らぬ恋語り
マンションの谷間風樹の野朝顔
走り梅雨眼科傘立混み合へり　那覇　中本清

アマリリスジョガーの結ぶ靴の紐
夏蝶の瑠璃色交尾むひかりかな
女学校跡梔子の香に噎せて
小満の満ちくる午後の潮溜
サイドミラー夾竹桃と装甲車

○花アロエ男夕餉の外竈　宜野湾　呉屋菜々

頭を低く悪疫過ぐを待つ余寒
斯くなれば神の領域鳥帰る
つちふるや岩根を焦がし紙銭焚く
春落葉燃やして拝所を煙らする
拝所の七つの香炉木の芽風

○野遊びや土帝君を覗きもし　西原　宮城勉

えやみ禍に俳誌まだ来ず四月終ふ
沖波の鶴翼白し夏来る

○ぞんぶんに翅を遊ばせ樗散る

五月闇句会の密の許されず
琉球は涙痕の邦花さにん

万象基金のご報告（一口　二千円）

津金房子　三口
匿名　五口
匿名　五口

（令和2年5月28日～6月25日・敬称略）

ご協力に感謝申し上げます。「万象」発展のため、大切に使わせて頂きます。

万象俳句会

同人作品の佳句

内海良太

一度だけ浦島草は糸投げる　穂苅照子

浦島草は面白い形をした花だ。花穂の先端から伸びる鞭状のものを浦島太郎の釣り糸に擬してこの名があるという。釣人を見ていると餌を取られたり、新しい餌に付け替えたり、何度も釣竿を振って糸を遠くに飛ばしている。この句は浦島草の糸が地面に伸びきっているのを、一度だけ投げられ、それっきりだと感じたもの。「一度だけ」とは言い得ている。

白薔薇に真昼の翳の深まりぬ　榎本文代

神の仕業とはいえ、この花の白さは何という白さだろうと思うことがある。この句は、白薔薇にとって一日中で最も明るい真昼間であるからこそ翳が深くなるという逆説。益々造化の神秘を感じる。

アイスクリン営めて横浜馬車道を　新妻奎子

明治時代に日本初のアイスクリームが横浜馬車道で「あいすくりん」の名で販売されたと聞く。作者はアイスクリームの古い呼び方とは知っていたが、「アイスクリン」を営め営め町の案内板を見ている。

沖縄を旅して、よくアイスクリンの看板を目にすることがある。沖縄風味のアイスクリンも捨てがたい。

空襲に焦げし樟芽吹きたり　小川明美

東京浅草の浅草寺の境内にも昭和19年3月の東京大空襲で焼け焦げた槻木や銀杏の木が残っている。戦後75年だが毎年元気に芽吹き、その木の佇まいは健気だ。

この句から静岡にも空襲があったことがわかる。作者はご両親か誰かに焦げた樟の話を聞いたのだろう。樟の芽吹きを愛おしく、眩しく見上げているのである。

天気図の台風一号五重丸　安岡みさき

室戸の安岡さんにとって一年中台風の動きに気を配らなければならない。今年も台風1号が5月に発生、幸い熱帯低気圧になったが、第1号に挨拶を込め、天気図の台風に赤色の五重丸をつけたのである。お手柔らかに願いますと。

卯浪立つ向う紀の国磯馴れ松　宮西修一

作者宮西さんの立ち位置はどこだろう。磯馴れ松の続く磯なので徳島市の海岸線に違いない。ここ白波の阿波徳島からうっすらと紀の国が見えるというもの。旧国名で一気に時代が遡り、土佐守を終えた紀貫之一行の帰る船が見えるようで楽しい句だ。

桃咲くや妻に聞かせる綾子の句　大久保進

よく分かる句。奥さんに細見綾子の句を話しているのである。句は〈ふだん着でふだんの心桃の花〉に違いない。

綾子の処女句集『桃は八重』は〈風吹かず桃と蒸されて桃は八重〉からの題名。初めての人にはむずかしくていけない。なるべく優しい句を奥さんに聞かせてやっていただきたい。

第十八回「万象」新人賞発表

第十八回(令和元年度)「万象」新人賞は、中鉢弘一氏(札幌)に授賞と決まりました。

万象俳句会

中鉢弘一(なかはちこういち)氏(札幌)

略歴

昭和19年1月、北海道室蘭市生れ。昭和37年オホーツク管内津別町役場に奉職。武蔵野美術短大、玉川大学卒業(通教)。博物館学芸員等の資格取得。趣味は絵画。平成21年、「万象」札幌北句会入会。

現住所　〒005-0005　札幌市南区澄川五条三丁目9-10-414

受賞の言葉

この度は「万象」新人賞を頂き、誠にありがとうございます。これも札幌句会の松原先生、札幌北句会の岡本先生のご指導の賜と深く感謝申し上げます。あわせて初句会や合同吟行会での交流、励ましをいただいている句友の皆さんにも心からの感謝を申しげます。

本来の趣味である絵画より俳句に明け暮れることの多い日々。力不足を痛感するばかりですが、研鑽を重ね、俳句の道を探って参りたいと思います。

［新人賞受賞作品］

編集部抄出

中鉢弘一　二十句

寒風の浜にさらされ破れ網

尾白鷲赤き餌啄む雪の上

氷上に釣り上ぐ魚の強張りぬ

原木の匂ひ漂ふ雪解かな

知床の遅き雪解や五湖五色

ユトリロの深みの白や水芭蕉

銀嶺を遠くに残し花の散る

雲雀発つ葦原の茎ばねにして

石狩川の太き蛇行や大夕焼

アカシアの若葉をわたる時鐘かな

鷲の巣の粗く夏空透かしけり

捨て網を浜昼顔の這ひて咲く

牧牛の背長や遠く夏の雲

玫瑰の実の輝きや砂州の果て

螢棲む川の匂ひの生ぬるき

鮭撲たるふる里の川見ぬままに

舟杭に枯木渦なす秋出水

吾に付きて参道登る雪婆

馬魂碑を包み黄金の銀杏降る

冬の峠針葉樹林の青深し

第十八回「万象」新人賞の選考経過

新型コロナウィルスが蔓延する特殊事情の中、今年度の新人賞の選考は選考委員と事務局の間でのオンラインで行われた。非常事態への緊急対応ではあったが、こうした形での選考方法は今後の可能性を考えさせるものとなった。

中村　千久

選考の手順は以下の通り。

① 推薦人（主宰が指名）の12名に、2名以内の推薦を依頼。

② 主宰による推薦と併せて、事務局が候補者リスト（平成31年4月号から令和2年3月号までの「万象」誌入選句数などを記載）を作成し、推薦人からの推薦文と共に選考委員に送付。

③ 選考委員（主宰ならびに主宰が指名した3名）は、事務局が送付した資料、「万象」誌掲載句、各自が収集した情報を吟味し、推薦する新人賞候補者3名に順位とコメントを付した選考結果を事務局に送付。

④ 各自の選考結果をもとに、事務局が「新人賞選考資料」を作成して選考委員に送付。

⑤ その後、主宰が総合的判断をした授賞内定者について、事務局が各委員の諾否の回答をとりまとめ、その報告を受けて主宰が授賞者を最終決定した。

選考委員、推薦人、事務局は以下の通り。

〈選考委員〉4名

内海良太主宰　　小林愛子副主宰

飛高隆夫万象作品選者　　江見悦子編集人

〈推薦人〉12名

松原智津子（北海道）　佐藤　雄二（新潟）

亀田やす子（栃木）　中村　千久（埼玉）

沢辺たけし（千葉）　山田　春生（東京）

柳澤　宗正（神奈川）　神田美穂子（静岡）

井村　和子（石川）　山本　麓潮（福井）

福島せいぎ（徳島）　前田貫美子（沖縄）

〈事務局〉2名

古川　京子　　中村　千久

オンラインによる選考の結果、第十八回「万象」新人賞は中鉢弘一さん（札幌）に決定した。

選考経過は以下の通り。

12名の推薦人からは、計15名、主宰からは13名の推薦があり、重複を整理した結果、候補者リストには20名の名前が挙がった。

選考基準としては、年間の入選句数、将来性、句会活動と支部活動への関与の度合い、年齢などが考慮された。

選考の結果、左記の5名を最終的な候補者とした。

中鉢　弘一（札幌）76歳　年間38句入選
岡村　純子（東京）68歳　年間39句入選
木内　マヤ（石井）48歳　年間36句入選
草間三香子（東京）78歳　年間37句入選
砂地　宏子（武蔵野）66歳　年間39句入選

（※入選句数は、平成31年4月～令和2年3月）

選考委員から寄せられたコメント要旨は以下の通り。

中鉢　弘一　実作面でこの一年間安定した作品が見られた。北海道の風土に根差した即物具象の俳句に挑戦しており、句柄も大きく今後に期待が持てる。「万象」の行事にも積極的に参加しており、札幌の句会活動では中核的な役割を担っている。

岡村　純子　指導を素直に受け入れて写生の勉強を続けており、最近は句境の深まりが見えるようになった。句会活動にも世話役の一人として参加し、事務的な仕事にも積極的に関わっている。

木内　マヤ　「新人賞と言えばこの人を推薦するのを躊躇わない」（内海主宰）　毎月、新しい視点でユニークな作品を発表しており、今後の飛躍の可能性を持っている。

草間三香子　句風が地味なところで損をしているところもあるが、身辺の自然や生活をきちんと写生しているので句に厚みがある。

砂地　宏子　四句入選数も多く、作句力の伸びが著しい。句柄も大きい。句幅も広く、感性のアンテナの数が多いという自在性が魅力。国語教師としての経歴から、「万象」の即戦力として期待する。

中鉢弘一さんに新人賞　内海良太

今年の新人賞候補者に13人の名を挙げた。皆さんそれぞれ新人賞推薦の基準を満たすもので、毎月の万象作品にも上位に名を連ねる人達で甲乙が付けがたかった。

フレッシュな意味で、万象作品の二句、三句組から彗星のように上位に食い込んでくる人を期待したが今年は無かった。

13名の候補者は、いずれ近い将来巻頭に名が挙がるであろう実力のある人ばかりで、選考する立場として、将来の活躍を想像しながら楽しく選考することが出来た。

私が新人賞に選んだのは中鉢弘一さん（札幌）。次点に、岡村純子さん（東京）、木内マヤさん（石井）だった。

中鉢弘一さん

実作面では、昨年の5、7、8月号で四句入選で活躍。こ

の一年間は安定した作品がみられた。札幌の句会活動では中核的な役割を担っていて、毎年の「万象」全国大会にも積極的に参加していた。

札幌の「万象」はこのところ同人会員の体調不調や家族の介護等、やゝ勢いにブレーキが掛かっているようなので、中鉢さんの新人賞で再び札幌に元気を取り戻してもらいたい。

岡村純子さん、木内マヤさん共、賞は逸したが「万象」に新しい風を吹き込んでくれる作家だと思う。

新人に期待　小林愛子

今年の新人賞選考は、新コロナ問題と重なったので在宅という形で行った。思いがけないことであったが、選考事務局の素早い行動に支えられスムーズに運んだのは喜ばしいことであった。最終的に絞られた5名に、主宰が検討・判断して中鉢弘一氏に決定した。

中鉢氏は長年オホーツクの地にお住まいというだけあって、そこでの一連の佳句から、旅人の目でない観察の細やかさが感じられ、かつ雄大である。

知床の連山翼下尾白鷲
雲雀発つ葦原の茎ばねにして
鷲の巣の粗く夏空透かしけり

これからは肩の力を抜いて自在になられることを希望します。

東京の岡村純子さん、石井の木内マヤさん、東京の草間三香子さん、武蔵野の砂地宏子さん、それぞれのご活躍を期待しています。

やはり写生を　飛高隆夫

新人賞候補として、一位・中鉢弘一さん、二位・草間三香子さん、三位・岡村純子さんを推薦しました。

中鉢さんは、北海道の風土の写生に正面から取り組み、句柄が大きく、句に力があります。草間さんは、地味な写生の句で、華やかさや切れのよさなどとは無縁ですが、身辺の自然や生活をきちんと写生しようと努めているので、句に厚みがあります。岡村さんの句は素直な写生の句ですが、最近、素直なという形容を外してもいいかな、というところまで成長して来ました。激励の気持ちも込めての推薦です。三人揃って、地道に着実に、即物具象の写生の努力を重ねています。センスの良さということになると、二、三の若手の名が思い浮かびますが、もう少し、写生の裏打ちが欲しいというところがあります。

砂地宏子さんは中学・高校の国語科の教員という経歴から、長年にわたって読み込んだ文学作品の素養があり、あと一回り大きくなったところでという思いから、推薦を控えました。

今後への期待

江見悦子

候補者20名について、選考の基準である「年間を通しての作品の優秀さと安定性」、「新人としての実力と将来性」の二点を頭に置いて、年間の発表作品に目を通した。月例投句4句入選の回数も考慮し、3名の方を候補者とした。

結果的に、3名のお名前が最終候補者5名の中に入っていたのは、大変嬉しいことだった。

一番に推した中鉢弘一さんは、〈知床の遅き雪解や五湖五色〉の北海道の大自然のダイナミックな詠みぶり、〈雲雀発つ葦原の茎ばねにして〉の発見と確かな写生の目、〈螢棲む川の匂ひの生ぬるき〉の感覚、〈吾に付きて参道登る雪婆〉の俳諧味と、着実に句境を広げている。毎年の大会には必ず出席、札幌の句会の中核として益々の活躍が期待される。

二番目に推した砂地宏子さんは、国語科教師としての長年の職を退いたゆとりがそうさせるのか、この一年の進境が著しい。〈うたたねの夢に数へぬ遠花火〉〈ちぎれ雲ひとつ残せし野分かな〉と、若々しく自由な詠みぶりが魅力的だ。

三番目に推した岡村純子さんは、素直で丁寧な写生の態度を貫き、〈鳰の巣の揺れて雛鳥こぼれ落つ〉〈瀬の音や茅屋根照らす冬の月〉と、モノを凝視しモノと一体化しようとする姿勢が印象的だ。砂地さん、岡村さんとも、首都圏にあって「万象」の活動への一層の協力を期待している。

俳句

8月号予告

7月25日発売

予価(本体945円+税)

特別作品 宇多喜代子・友岡子郷・西山睦

大特集

今こそ身につけたい！

俳諧味の極意

▼現代俳句における「俳諧性」……高野ムツオ

▼テーマ別論考……矢羽勝幸・西村麒麟

▼俳諧味アップ作句術……高橋将夫・亀井雉子男・小林貫子・土肥あき子

座談会

発想力の鍛え方

小澤實×仲寒蟬×和田華凜×関悦史

▼コロナ俳句の評価 ▼発想力といえばこの三句

連載

名句水先案内…小川軽舟／偏愛俳人館…恩田侑布子

現代俳句時評…白濱一羊／俳句の中の虫…奥本大三郎

シリーズ／コロナの時代の俳人たち 寺井谷子・伊藤伊那男

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(https://bookwalker.jp/)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA https://www.kadokawa.co.jp/

花あんず

中條睦子

遠山の白さ際立ち春きざす
風光る犀星中也知る欅
犀星忌近き水音鳥の声
雪解川蒼茫とゆく速さかな
うららけし立雛形のあんず詩碑
犀星の山河きらめき燕来る
雪吊りを解く碧天に鳶の笛
草稿の字の細やかや日の永し
川暮れて音高まりぬ花あんず
花浴びてきて読み返す杏つ子

ニュースに誘われ、犀川の辺を散策した。犀星忌の近い雨宝院の庭には淡い紅色の杏の花が真っ盛りだった。犀星が幼少期の遊び場だった神明宮には樹齢千年の大欅が境内狭しと鎮座している。幼少期を金沢で過ごした中原中也もこの境内で軽業を見た。その記憶から「サーカス」の詩が生まれたと言われる。誰もいない境内で欅を見上げていると「ゆあーんゆよーんゆやゆよん」のあの不思議な音が聞こえたような気がした。

桐の花

亀田やす子

水門の際にかたまる蕗の薹
クローバーのはびこり路肩見えざりき
紫雲英田の甘き匂ひのする朝
清流の底にてんてん蜷棲めり
田を埋む雀の鉄砲鷺翔てり
弁天堂の石段長し鵤(いかる)鳴く
一群のカラーに鯉の集まれり
豆腐屋の匂ふ朝や桐の花
流れ来る胡桃の花の長きまま
帽子打つ雨の早さよ花あやめ

新型コロナウイルスの関係で外出自粛の続く中、近くに名水百選の弁天池があるので体力作りのため往復を日課としている。

春から夏にかけて弁天池の周りは観光客で賑わうのであるが、ウイルス問題でホテルや店がときどき閉じている状態である。

観光客が無く静かに散策できるが、俳句を詠もうとするには自然の景色だけではもの足りない。ファミリーで来ている客の賑やかな声や動作が結構感動を与えてくれるものである。

十年経て寒夜の夢に父の声

十年ひと昔と云う。自分自身の十年前は、リーマンショック後の不安定な世の中でした。会社は、不景気のどん底に陥って会社更生法を申請し、己は、リストラされてハローワーク通いをしていた頃です。今、正に新型コロナにより同じようなことが起きようとしています。これから益々厳しさを増すのではないでしょうか。

さて、先生の掲句では、「十年経て寒夜」に父上が現れて「声」がしたと。幾つになっても父は父、母は母で、父が居て母が居てと良く詠われる。一般的には、母との思い出が深いものですが、先生は、父が出て来たのである。叱られた記憶が蘇って来たのか、それとも父上の印象が強烈だったことによるものか、はたまた寒夜でトイレに行きたかったのかと想像してしまいます。

句集『暮色』の中に、「父」「母」を詠んだ句は、

ちちははの墓に拾ひし落し文
母逝きて冠り初めたる冬帽子
鬼は外バリトンの父懐かしき
母の忌の一日落葉見てをりぬ

このように「父」よりも「母」をお詠みになられた句が、ご多分に洩れず多いように感じました。

（竹澤竹里）

この闇に山茶花の赤沈みゐる

掲句は「万象」の平成24年3月号に発表され、平成26年刊の句集『暮色』に収められている。

山茶花の花は一重咲き・八重咲き、色は白・赤・桃色など多くの園芸品種があり、庭木・生垣に利用される。

句に詠まれている山茶花はそれほど人の手の入っていない自然な樹形でしょうか。常緑樹の小振りの葉は緑が濃く、一重咲きの赤い花が枝先の葉を被っている。

作者は庭に立ち、日の中の山茶花を愛でている。夜、ふと山茶花の花を見ようと庭に出てみると、冬の深く厳しい闇が広がっていた。闇の中に間違いなく山茶花は咲いている。花の気配、存在を感じようと闇をみつめる。目の前の闇は花を捉え、花は闇の中に吸い込まれたかのような静けさである。この闇の中に咲いている山茶花を「赤沈みゐる」と詠まれた。

句集のあとがきに「身辺の目に触れるもろもろに、出来る限り心を通わせるように努めてきた」と、さらに「それを表現し得たと感じた時、その対象は自分の世界に取り込まれ……」と述べている。

ものに対する深い思いで、対象となるものを見つめ、作者の世界をつくりだしている。

（芝宮留美子）

福島せいぎ・内藤恵子自選句鑑賞④

打ち寄せる卯浪の芯へ投網打つ　せいぎ

平成元年作。『青春』に次ぐ第三句集『沙門』所収。『沙門』は平成元年より十年間の作品の中から「風」誌に投句をして、沢木欣一先生の選を得た作品と、「なると」誌に発表した作品から四百二十二句を纏めた。平成元年は作者五十歳。俳誌「なると」の主宰として重責を担った年であり、さらに宗教界の仕事や寺院新築、新四国八十八ヶ所霊場整備と社会の要請に応え駆け抜けた一年であった。

掲句は徳島県海陽町海部川河口付近を詠った。海陽町に奥様の御実家がある。自注に「初夏の波頭はまばゆいばかり。沖には遠く出羽島が霞む」とある。氏によれば鮎漁とのこと。一読大景描写の句であるが、句の背後に投網漁の厳しさを潜ませている。季語の卯浪は「白磁のごとく」「船より高く」とかの措辞はよくあるが、「卯浪の芯へ投網打つ」の表現は読む者を圧倒する。簡明で具体的なので読者に鑑賞の余地を残す。太平洋の卯浪の高まりの中で網を打つ漁師の躍動が目に浮かぶ。あとがきはこう結ぶ。「書名は『仏門に入り道を治める人』の意だが、仏道、俳句道に精進の意を込めた」と。氏は「なると」の目標「伝統俳句に根ざす自然観俳句づくり」を力強く体現されている。

（望月敏男）

ゆるやかに巻かれて匂ふ大茅の輪　恵子

掲句は『冬芽』薄氷の章に所収。職場句会「百花」の青梅御岳山の吟行句。昭和六十二年十月号「風」誌巻頭句。陰暦六月晦日に神社で行われる浅茅で作った輪形の中を潜って、身に付いた災厄や穢れを祓う神事である。

御岳山の山頂にある武蔵御嶽神社では、六月の晦日の前日に御師が十数人で山上付近の茅畑より茅を刈り取り境内にテントを張り茅の輪を作る作業をする。

出来上がった茅の輪は山頂の宝物殿前の境内に据える。背高の神官が烏帽子を挿頭し通り抜けるので、高さ二・五米はある。三人掛りで持ち上げる大きな輪を作り立てると伺った。

輪に触れんばかりに近寄り、初めは輪を潜ってから左に次は右に、三回目は左に回るなどして三回潜ったのでしょう。青々とした茅の束は張りがあって強い。茅を一摑みずつ編み上げ、これを心棒に巻き付けてある。

縄が緩く巻かれているとの素直な驚き、茅の輪の青い匂いに命が宿っていると感じる清清しい作者の心中が垣間見える。じっくり見つめて感動した実感が伝わってきて、作者の細やかな優しさが大茅の輪を讃える句となっている。

（小林珠江）

雑俳

第19回【韓国人の俳句】

八木　忠栄

欧米で「ハイク」が、古くから盛んに作られてきたことは知られている。世界俳句協会もあって、国際的に活発に活動している。フランスの有名な詩人ポール・エリュアールは、すでに百年前に俳句を作っていたし、アメリカのエズラ・パウンドも作っていた。

中国には漢俳協会がある。わが国には日本漢俳協会もあって、さかんに漢俳をつくっている人を私は知っている。では、お隣の韓国ではどうか？

もう一度濃きルージュ引くコッセムチュイ
小さきもの菫に語るときは母語
くちびるに花ひとひらや多弁恥ず

この三句は、韓国伝統舞踊家・金利惠さんの作品。金さんは東京生まれ。大学卒業後、伝統舞踊を求めて韓国へ渡り、ソウルに三十八年在住。私は金さんに会ったことはないし、韓国の俳句事情にくわしいわけではない。

「コッセムチュイ」は「花冷え」の意味。二句目、金さんは幼児期日本語で育ったが、韓国語こそ「母国語」。金さんは一月に、東京と名古屋で『俳舞』なるものを公演した。

（引用句は「中くらいの友だち」6号から）

公益社団法人 俳人協会

◉特集
令和の子育て俳句
今泉礼奈／大高　翔
神野紗希／杉原祐之
高柳克弘／西川火尖
野口る理／藤井あかり
日下野由季／堀切克洋

◉巻頭三句
池田澄子
榎本好宏
澤井洋子
古田紀一
花谷　清
野木桃花

◉俳句と短歌の10作競詠
松本てふこ
竹中優子

◉その時、俳句手帖
横澤放川

◉人と作品
柴田南海子『朝ざくら夕ざくら』

◉好評連載
南　伸坊　猫の俳句
筑紫磐井　俳壇観測
坂口昌弘　忘れ得ぬ俳人と秀句
青木亮人　句の手触り、俳人の響き
大西　朋　俳句への まなざし
神作研一　手のひらの江戸 ―古典籍を旅する
藤村公洋　俳句のつまみ
二ノ宮一雄　一望百里

俳句四季 Haiku Shiki
2020年8月号
7月20日発売
定価1000円（税込）
http://www.tokyoshiki.co.jp/　東京四季出版
〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

特別作品評（6月号）　沢辺たけし

オロロンライン　佐藤　哲

「オロロンライン」を調べたら、小樽から稚内までの日本海側に沿った景色の素晴らしい道路とのこと。

鰊曇死語となりしか海のいろ

「鰊曇」とは北海道の鰊が獲れるころの曇り空。鰊が獲れなくなった今、確かにある意味「死語」と言ってもいいのだが、この季語があるため海と空の景が浮かんでくる。俳句では決して「死語」にはならない言葉である。

天も地も雲雀の声す潮騒に

「潮騒」の中に「雲雀の声」が聞こえたのだろうが、「潮騒」が囀りを促しているようにも思える。「天も地も」が「雲雀の声」のにぎやかさを上手く現している。

車来ず人来ず道は五月晴

北海道の広大な景の中での「車来ず人来ず」だからこそ、「五月晴」が生きてくる。しかし、独立した一句としてみると、今の状況では新型コロナウイルス感染防止の緊急事態宣言による「車来ず人来ず」と解してしまう。

壁のごと大地にでんと利尻富士

季語を入れた方が句に深みが増し、景が活きてくるのでは。

漁火を付けし漁船ら居待月

「付けし」は「点けし」では。また「漁火」と言えば「点けし」は無くてもよいのでは。表現している景は美しい。

春の燭　赤松郁代

渓谷の空は水いろ竹の秋

「竹の秋」は晩春の季語。「渓谷の空」を見上げたら、覆いかぶさる芽吹きの木々、その枝の間に「水いろ」の空が見えたのだろう。青と言わずに「水いろ」と言ったのがこの句の眼目、芽吹いた葉の瑞々しさまでが見えてくる。

白樫の倒木くぐる春の水

伐ると材が白いので「白樫」というが樹皮は黒っぽいので、別名「黒樫」ともいわれる。この句の場合、「黒樫」と言ったら良さは半減するのではないか、文字から受ける感覚的なものだが「白樫」だからこそ「春の水」の明るさが活きてくる。

湧水のしぶき浴びたり蕗の薹

「蕗の薹」と「しぶき」に春の息吹と清しさが現れていていいのだが、「浴びたり」がちょっと強く感じる。普通に「しぶきのかかる」と言った方が「蕗の薹」には相応しいのでは。

対岸の崖を下り来るうかれ猫

「うかれ猫」が渓谷に水を飲みにきたのか、或いは休みに来たのか、「崖を下り来る」という珍しい景を捉えた。上五の「対岸」悪くはないのだが、崖の様子を具体的に言った方がより鮮明な景となるのでは。

特作十句、等々力渓谷の春の姿を印象鮮やかに詠んでおり、楽しく読ませていただいた。

同人作品評（六月号）

成瀬真紀子

吠えあふが犬のあいさつ春の風　森山暁湖

散歩中に出会った犬どうしが吠えあっています。これは「犬のあいさつ」だと優しく見ています。その思いを「春の風」に託しました。季語が暖かさと長閑さ優しさを伝えます。類想の無い句と思います。

囀りやスコーンを焼く朝の卓　三好かほる

季語の「囀り」と「朝の卓」の取り合わせがとても清々しい句です。窓辺かベランダでしょうか。作者の日常のひとこまかも知れませんが、コロナウイルス対策で外出自粛の中、家に居ても楽しもうとする心意気を感じます。

春時雨かつて花街に文士宿　横川良子

芸者屋・遊女屋が集まっている地域「花街」。作者にお聞きすると、場所は神楽坂で「和可菜」という老舗旅館のことだそうです。調べてみると今井正、内田吐夢、田坂具隆、山田洋次など、日本を代表する映画監督や作家たちが和可菜に滞在し作品を書いており、文豪たちが愛した老舗旅館とありました。成功を夢見ている文士を住まわせ面倒を見たようです。明るい希望を感じる「春時雨」の選択が成功しました。

外出は禁止と言はれ春寒し　山本絢子

今年は四月早々に緊急事態宣言が出され、外出禁止となりました。季語「春寒し」が身体にも心にも掛り残念な気持が伝わります。同時掲載句に〈曾孫と遊ぶひと日や春うらら〉があります。ひと時の癒しを大切に、俳句を詠みながらウイルスの終息を待ちたいと思います。

春光や刃物研ぐ水やはらかき　下嶽孝一

季語「春光」は本来春の風光のことですが、春の陽光の意味もあります。作者は「春光」の中「刃物を研ぐ水」が「やはらかき」と発見しました。その感覚に共感いたします。指先から春の訪れを感じ、水も眩いばかりです。

手毬寿司肴に酌める雛の間　桔梗純

雛を飾り手毬寿司を用意して、それを「肴に」酒を「酌む」。そんな幸せな雛の日を過ごされたようです。子供達がいるのかな、大人達だけかな、一人だけかも、と想像が広がります。余韻のある句と思います。

尻立てて磯の海苔掻く媼かな　西本才子

同時掲載句に〈海苔篊に朝日差し込む東京湾〉があります。ので同じ場所の句と思います。掲句の「尻立てて」という具

体的な表現によって「海苔掻く媼」の姿が鮮やかに浮かびました。眼前の景色のどこを切り取るか、どのように表現するか、を学びたいと思います。

阿夫利嶺を仰ぐ古墳や下萌ゆる　佐藤嘉洋

神奈川県伊勢原市にある比々多神社の吟行句と思います。神社の敷地内や周辺に古墳や遺跡が多数あるそうです。作者は、古墳が「大山（通称阿夫利山）を仰いで」いるようだと捉えました。「下萌」は名詞なので「下萌ゆる」という使い方は認めないという意見もありますが、「古墳」と「下萌」の取り合わせが面白いと思います。古いものと新しいもの、遠景と近景が、春の息吹の中不思議な世界を作っています。

毎朝のことよ庭より雉啼くは　大長文昭

この句を読むと〈毎年よ彼岸の入に寒いのは　正岡子規〉が浮かびます。子規の句には「母の詞自ずから句となりて」という前書きがあります。掲句も誰かの言葉がそのまま句になったのでしょうか。口語が生きています。御自宅かは分かりませんが、毎朝雉の声が聞こえるなんて素敵です。

茹で上げて貰ひ物でと螢烏賊　若島久清

この句も「貰ひ物で」と言う口語が生き生きとした情景を見せてくれます。相手に気を使わせまいとする言い方から、日頃の良好な付き合いが想像されます。螢烏賊は富山湾の特産物です。茹で上げた螢烏賊はぷりぷりとして絶品です。

許しあふ文字の乱れや寒見舞　岸川素粒子

「許しあふ」からお二人の親しい関係が見えます。乱筆もお互い許しあい、行き来する手紙。それが「寒見舞」であることが胸を打ち余韻があります。説明しないで無駄な言葉を省き、文芸としての俳句を教えてくださいます。

春雨や稽古かへりの鏡花みち　豊田高子

金沢市は金沢に生まれた作家泉鏡花にちなみ、浅野川の天神橋から茶屋街の主計町までの沿道を「鏡花の道」と名付けています。掲句は「春雨」と「鏡花みち」の取り合わせ。しとしとと降り続く晩春の雨と、浪漫と幻想の世界を描いた鏡花の文学が響き合い、しっとりとした句になりました。何の「稽古」かしらと想像が膨らみます。

牛百頭百の尾を振る牧開　石田野武男

「牛百頭」に、なるほど「百の尾」なのですが、「振る」と表現したことで「牧開」の解き放たれた喜びが描けました。焦点を「尾」に絞り、リズムの良い写生句と思います。

弾かれて乗込鮒が草の上　大湾宗弘

春になり鮒が産卵のために集団で浅瀬に移動し、小川や田の中にまで乗り込む「乗込鮒」。「弾かれて」と「草の上」の短い言葉でその勢いを活写されました。鮒が草の上でぴちぴちと跳ねる様子が見える句です。

メーデー

塗木翠雲（四街道）

やはらかく春筍煮込む夕べかな

良く笑ふ稚児の額に春の泥

短夜やカタカナ書きの賢治の詩

メーデーの死語となりゆく広場かな

鋤き起こす土の脆さよ豆の花

コロナ禍に病める地球や青芭蕉

馬鈴薯の花にやさしき安房の風

田の隅に十株ほどなる黄の菖蒲

御所の初夏

喜多尾明子（日野）

築地塀の影を踏みゆく薄暑かな

梧桐や御車寄より案内立つ

紫宸殿の屋根の均斉清和かな

御座しまさぬ宮の悠久花橘

回廊に葵祭の具を揃ふ

清涼殿の呉竹（くれたけ）漢竹（かわたけ）風薫る

公達の蹴鞠の庭や緑さす

濡れてゆく御所の白砂若葉雨

万象ノオト

テーマ「川」

帷平川

横浜　小板橋泰山

横浜市旭区若葉台に源を発し、市内を東に流れて横浜港に注ぐ帷平（かたびら）川。二十年程前にアザラシのタマちゃんが出現して有名に。川沿いの鶴ヶ峰地区に親水緑道公園がある。多くの木々と池、小川や庭園ゾーン等があり、バードウオッチも楽しめる。歩いて二十分程の自宅に住む私は、週に一度は作句も兼ねて森林浴と四季の変化を楽しみに訪れている。また、趣味の水彩画やスケッチも楽しんでいる。

帷平川では、今年はウイルス流行で中止となったが、昨年まで鮭の稚魚を放流する東日本大震災復興イベントも行われていた。以前は横浜で一番汚い川と言われたこともあったが、近年はアユの遡上が確認される程、水質が改善され、住民に愛されている。

長瀞のライン下り

大和　中谷由郁

子供の頃、初夏に家族で行く長瀞のライン下りが何よりも楽しみだった。額にうっすら汗が滲む頃、よし！とばかりにライン下りに行くのだ。今でもついこの間のことのように思い出す。

長瀞の岩畳に素足を置くと「暑いっ!!」このくらいがいい按排だ。船頭さんが岩を蹴り上げ、川面すれすれまで舟の傾く、あの高揚感。川の飛沫が顔を打ち、キャッキャ、ウフフと思う存分初夏を楽しむのだ！…かと思うと、ゆっくり川魚の横を行きながら触る川縁の枝先。ふわりと若葉風を受ける清々しさ。

この記憶と感触は、私の中に今でも染み込んでいる。だから、若葉が風に揺れてサラサラ音を立てると、川の流れと胸の高まりを思い出すのだろう。

台風

千葉　大月玲子

毎年、台風の時期が来るとあの日を思い出す。

その日は八幡神社の祭りで、父方の祖母を招き夕食にはご馳走が並んだ。夕方からの雨は八時頃には裏の大川の水位を一気に上げ、見る間に床下浸水。父が畳を上げ、母屋の隣にある蔵の二階へ祖母と子供達を避難させる事となった。初めに祖母を、次に私の番になった時には、父の腰まで水が来ていた。小学生の私は恐さよりも父におんぶされた嬉しさの方が勝っていた。

蔵は普段は絶対に入ってはいけない処だったので、二階は見た事も無くて興味津々、楽しい一夜であった。

翌朝、水が引き鯉や鰻がピチピチ跳ねているのを、近所の大人達が捉まえていた。

その後、大川は拡張し護岸は整備され、川向こうの子供達の探検場だった森は消え、今は大病院が建っている。

鴨川

和光　板垣陽子

別段、ロマンティックな思い出はないが、加茂川と高野川の合流地点にある糺（ただす）の森の東外れに私は生まれた。合流した川を鴨川と言うらしい。よく母と出町の商店街に通った。森の中の下鴨神社の参道を通り抜ける。時には縄飛びをしながら。母はそれを見て笑っていた。私を買物に連れて行く事が母の楽しみになっていたのだろうか。

糺の森を抜け鴨川を橋から眺めるのが好きだった。大文字の送り火は人出の少ない近くの出雲路橋と決めていた。

父は鴨川の土手の桜が咲き始めると毎日にんまりとした笑顔で帰ってきた。

数年前、姉と鴨川あたりを歩いてみた。あまりの懐かしさに靴擦れに気付く事もなく。

鮎の川

宇都宮　福田　弘

私は、川と聞くと鮎釣と連想する程の釣大好き人間です。

体力の限界から釣竿を捨てた今も、新聞、雑誌等々あらゆる媒体の情報に耳をそばだてています。そして、河鹿蛙の音を聞きながら、当りを待つ朝の静寂、竿も灼ける炎天下の川の煌めき、夕闇に名残惜しみつつ竿をたたんだことなど、あの川、この川の思い出に耽っています。

てのひらの鮎を女体のごとく視る

沢木欣一

先生は、釣のことを詠んだのではないかも知れませんが、釣好きとしては、釣上げた鮎のくねり、ぬめり、香りをしみじみと味わう醍醐味を詠み上げたものと受け止め、さらに鮎の川への想いをつのらせてしまうのです。

安倍川と私

静岡　髙橋一夫

自分にとって川といえば、まず安倍川をあげたい。今いる所も安倍川の扇状地のようだし、毎日の生活用水、飲料水も、安倍川の伏流水をいただいております。入学した小学校の校歌にも「流れも清き安倍川の」という一節がありました。静岡市の水道水のおいしさは確かなようです。高校生の頃より登山に興味を持ち、竜爪山、真富士山、十枚山、八紘嶺へと安倍川沿いの稜線を中心として、目ぼしい山は登り終えることができました。

吟行のため、安倍川支流の山里へ入る事も多いです。静岡市の奥山に、縁側カフェというものがあります。農家の縁側でお茶、漬物等をいただき、山村の人と交流して来るというものです。二度ほど行って集落を吟行して、句会をやらせてもらいました。

「万象ノオト」投稿募集

▽12月号「つぼ」（8月末日締切）
▽1月号「石段」（9月末日締切）
▽長　さ　本文 17字×19行以内

〒194－0041　東京都町田市玉川学園3－10－19　桔梗　純

埼玉

童謡・唱歌の発祥地

幼い頃に憶えた童謡・唱歌は、いつまでも忘れないばかりか、聞けば今も懐かしく心を揺るがせる。埼玉にはそうした歌の発祥地が多くあり、その記念碑を訪ねた。

『案山子』（山田の中の一本足のかかし、天気の良いのにー）

さいたま市緑区の見沼代用水路の直ぐそばに敷地3㌃程の見沼氷川公園がある。その正面近くに高さ3㍍のブロンズの「案山子像」と唱歌「案山子」の詩碑があり、訪れる者を迎えてくれる。この地で生まれた作詞者の武笠三を記念して建立されたもので、記念碑の揮毫者は国文学者の金田一春彦。公園は通称「かかし公園」として親しまれている。当地見沼は、昔は広大な沼であったが江戸時代に干拓されて稲穂の稔る田園となり、かかしの生まれる環境が整ったのである。

『通りゃんせ』（通りゃんせ〜〜ここはどこの細道じゃ）

川越市にある三芳野神社は、菅原道真を祀って平安時代に建立され、江戸時代初期に川越城の鎮守として、城主酒井忠勝により城郭内に移された。「お城の天神さま」と呼ばれて敬われたが、他方で八万石を領する川越城の城内とあって、一般庶民は気軽に参拝など出来ず、大祭とか七五三の祝いなどに限られていたのであろう。そしてようやく城内に入っても警護の侍の監視が鋭く、庶民は恐る恐る帰って行ったので、「行きはよいよい帰りは恐い」の歌詞の由来ともなった。

唄に細道とある神社の参道には「わらべ唄発祥の所」と大書された碑があり、「通りゃんせ」の歌詞の一部「ここはとこの細道ぢや天神さまのほそみちぢや」が脇に彫られている。

『七夕さま』（ささの葉さらさら軒端にゆれるー）

埼玉県加須市佐波（旧大利根町）に位置し、JR宇都宮線「栗橋」駅から7㌔程のところに、道の駅「童謡のふる里おおとね」がある。この道の駅の正面に「たなばたさま」の歌碑と作曲者下総皖一の銅像が並んでいて、ボタンを押すと童謡七夕さまの聞き覚えのあるメロディーが流れてくる。

下総皖一は他に「野菊」「かくれんぼ」「ゆうやけこやけ」「花火」なども作曲した。なお、この道の駅と少し離れたところに「たなばた公園」があり、この中の「童謡のふる里アスターホール」では毎年七月に「たなばたさまコンサート」が催される。

（山本右近）

俳書探訪

古川京子

「鶴」（六月號）第九〇〇号　主宰　鈴木しげを

160頁から成る記念号である。創刊の由来の概略等は平成三十年八月に発表しましたが、「900号新たな出立」という主宰の挨拶を抜粋すれば「昭和一二年九月、石田波郷が東京で創刊。かの惨たる戦争によって休刊においこまれることがなければ千号近いことになる。しかし敗戦の灰燼の中から蘇生した「鶴」には多くの者が集まり」とある。平成二十五年、鈴木しげを氏が第四代の主宰を継がれた。

ページをめくると歴代の主宰四名の短冊が並ぶ。それぞれの筆のそれぞれの個性が眩しい。

風雲の少しく遊ぶ冬至かな　石田波郷
雛の夜の酒の席とはなりにけり　石塚友二
草や木や十一月の深大寺　星野麥丘人
踊笠おとがひ仄と泛び過ぐ　鈴木しげを

西行忌　主宰鈴木しげを（12句より）

新型コロナめ
地虫出づはて仕事なし句座もなし
菜飯一椀父の忌の膝正しては
白妙の独活に緋いろのさすところ

鶴の年譜　大川倭玖編は、平成二十八年二月号～令和二年三月号まで、「鶴」誌に毎月掲載された目次を三十五頁にわたり美しく網羅し、圧倒的な風格がある。

第九回20句競詠作品賞を発表している。（応募総数73篇）入賞「梅探る」藤岡毬和より

潮湯治なごりの磯や冬あたたか
冬紅葉七十代は黄金期

佳作三編より一句ずつ

春田打つ揺るる吊手の輪の向かう　須田さらさ
冬晴やもとより夫の早歩き　佐久間鮎子
倒木に栗鼠を走らせ山笑ふ　小林律子

写生句について「写生は者生？」を小島雷怯子氏が執筆。子規の提唱に始まり俳句界における写生の一般論を展開した上で、次のように記す。「石田波郷読本の俳論抄には『新しい発見、情緒ある写生、その上に作者の胸中にあふれる詩の泉がそれらの対象に光や音楽を与えるとき、豊に息づく俳句が生まれるのです。』（『写生と心情』昭4・3『主婦と生活』）私はこの文章が俳句における『写生』のあり方を最も端的に示していると思うのだがどうであろうか」と。

多士済々の健筆と感慨を結集した記念誌第900號は「鶴」の皆様の忘れ得ぬ一冊となったことに疑いは無い。

（筆者住所　〒277－0083　柏市日立台二－四－二二）

巻頭作家（七月号）プロフィール

草間三香子（東京）

草間三香子さんとは、不思議なご縁で三年前から句会「杜の会」でご一緒している。岩崎眉乃さんがご入院中、病室で、眉乃さんが指導されていた「杜の会」の将来を山本絢子さん、幹事の草間三香子さんと私の三人に話されたことがあった。そのひと月後に岩崎さんは亡くなられ、現在、その時の意思を受け継いで、山本絢子さんと私の二人で「杜の会」の指導をしている。

草間さんの俳句歴は、お二人の子育ても一段落した平成十五年頃、NHK俳句教室の岩崎さんの講座に出向いた折、係りの人の熱気に躊躇していたところ、その教室に在席していた山本絢子さんに声を掛けられたのが、今日まで繋がっている。

草間さんがよく気が付いてお世話をして下さるお蔭で、愉しい句会となっている。皆さんのお手本になっていた岩崎さんの指導のことを聞くと「自分らしい句（言葉）、切れ字、中八に気を付け、分かり易いこと、それにマイナスの句は詠まない」など沢木欣一先生のご指導と重なる指導で、今でも心に残っている、との事だった。

今年の作品を拝見すると、二月から七月の半年で四句と三句が三回ずつ、句の幅の広さとなんでも受け入れる柔軟さに驚く。その二十一句を紹介する。

二月　鬼の子のふかれてゐたり石灯籠
　　含みたる椎の青実の仄甘き
　　雲間より日の差す十月桜かな
　　棚曇り香りの深き秋のばら
三月　野仏に菊一本の供へあり
　　返納の運転免許野分晴れ
　　大小の鈴売る参道石蕗の花
四月　天神の池に散らばる浮寝鳥
　　エプロンを掛しままなる初写真
　　初凧や荒川の風とらへたる
五月　雨粒をとどめてゐたり冬木の芽
　　雪催ひ炊出しの列長きかな
　　幼児に力士の渡す追灘豆
　　二ン月の風のなかなる剣舞かな
六月　少年の帽子を弾む追灘豆
　　うららかや米屋の軒に雀群れ
　　一瞬にひよどり散らす梅の花
巻頭　托鉢の錫杖の音花菜道
　　洞深き銀杏大樹の芽吹きたり
　　小流れの木橋の下に蝌蚪生まる
　　卒塔婆を担ぐ青年桜東風

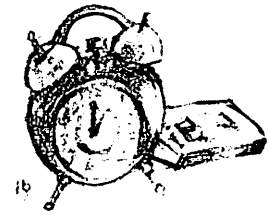
最近はふるさとの富山の文化、歴史などを再認識しているそうである。

現在は「杜の会」の他に「万象」中央句会、本郷句会、東京俳句スクールに参加されている。ご家族の協力のもと、明るい草間さんのこれからが楽しみである。

（内藤恵子）

万象作品

飛高隆夫選



籐椅子に聖書と朝の珈琲と　那覇　謝花寛営

ハレルヤの風いくたびも薫りけり

十字架の重きを問へり復帰の日

病院はノアの箱舟麦の秋　徳島　山本瑤子

トンネルを抜ければ桜吹雪かな

鉄線の絡みし蔓を解きけり

初音聞く山の空気に包まれて

幸せは笑顔に来るとチューリップ

ものの芽や毛のやはらかき絵筆買ふ　横浜　小板橋泰山

鐘供養果ててとんびの低く舞ふ

初蝶や長椅子ひとつ山の駅

讃美歌の洩れくる径やリラの花

籠の鳥気分の窓辺つばくらめ　小松島　田上幸子

人も車も風もなき街蝶の昼

庭の樹に吊すふらここ猫の乗る

大漢老後は車庫にメダカ飼ふ

天文台に烏のあそぶ日永かな　調布　大林彬彦

春愁や我ありゆゑにわれ思ふ

桜貝寄せ引く波に躍りをり

玩具買ふこと思ひ立つ子供の日

若葉垣少年の弾くピアノの音　横浜　岡　元枝

蕗の皮剝く指先の黒ずみぬ

人絶えてひそかに風の薫りけり

豪華船降りくる人や風光る

ひと時は岸辺に休む花筏　船橋　内田節子

囀やいづこに置きし花鋏

しばらくは空を遊びぬ花吹雪

掌を置いて膝労りし花疲れ

松蟬や番号で呼ぶ古墳群　松戸　野田成夫

子子の羽化の跡浮く古盥

万緑や赤き布靴歩き初む

麦秋や独逸敗れし古日記

落ちしままに地に定まれり紅椿　調布　荒井　仁

石投ぐるとき輝けり春の川

休校の庭桜蘂降るばかり

山峡に帯となりたり花吹雪

すぢ雲に地震の噂か亀鳴けり　札幌　北浦詩子

子ら消えし小公園に桜蕊

廃線の枕木の間杉菜かな

玻璃窓に当りて逝きぬ引く小鳥　佐々木　茂

永き日を文読み暮らすいのちながコロナ禍の札幌の路地リラ薫る　札幌　島崎　洋

揚雲雀測量ドローンのはるか上

信楽の狸に春のマスクかな

連翹の垣から覗く通学帽　園田鶴子

半仙戯風を巻き上げ雲散らす

春の熊叱る老爺に後退り

ティショット打ち込む先の雲雀の巣

花の闇打菓子ひそと崩れをり　高山晢英

巡礼のゆく先々に蝦夷桜

幼子の離さぬ土筆くたびれて

校庭の桜はことのほかゆかし　竹重富子

花吹雪いつもなんでもない道に

木道の隙間に草の芽の太く

春風や水面に銀の波広げ　田邊政代

納骨の読経に散れる桜かな

春燈や港にゴッホの星月夜

豊平川の河原をわたる桜東風　中鉢弘一

霊園を白く灯して北辛夷

春空より鉄筋工の声降り来

流れゆく雲より白き北こぶし　札幌　八代洋子
春惜む玻璃越しはるか眉の月
聖五月一進一退コロナ邪気
春日向這ひ這ひまではあと一歩　江別　太田佳美
飛花落花緩りと行かむ煉瓦径
石狩川を跨ぐ百余の鯉のぼり
山寺の高き鐘楼牡丹の芽　東根　門脇好子
独り居を励ます電話春灯
剪定の切り口匂ふ桃畑
立てし茶の湯気に揺れをり春日影　新潟　佐藤幸示
喝と置く白き碁石や山笑ふ
嬰児の帽子にとまる初の蝶
逆波の浅春の日を返しゐる　高野松風
踏石の宿下駄さぐる朧かな
ほほけしはみなくの字なり猫柳
ホテルの灯の高きを映し湖朧　中塚滋子
旅果てし安堵や弥彦山朧
鳥交る堂にあまたの微笑仏
花冷えの町静かなり鳥までも　三谷愛子
蔦の芽の昨日三つや今日五つ
つくしんぼ食す分丈つみて来し
岡持の蓋とる庭や夕桜　燕　渡辺志ま
春惜しみ堤を歩み尽したる
花冷の眼鏡いづこへ消えしかな
酒蔵の白壁に映ゆ柿若葉　宇都宮　安久都　登
天を突く地裁の庭の白木蓮
公園の小径縁どる芝桜
新開地ここもあそこも鯉幟　福田　弘
万緑の吐き出すやうな渓の音
蝙蝠の舞ひ初めたり夕煙
鶯の声に目覚むる七戸かな　芳賀　小林元子
父と子の内緒の話若葉風
若葉雨上がり田畑のふくらめり
苺摘む先づは大きな一粒を　塙　テル
蜘蛛の糸垣根を越えて光りけり
山吹や雨の参道明るくす
中天に空気ふるはせ揚雲雀　福武幸子
蕗の葉へ水車の飛沫の光かな
吹きつさらしの田圃に出でて蝶乱る
初夏の堰の旋律里明くる　真岡　上野恭子

花しどみ児等の基地への径塞ぐ　鹿沼　渡辺利子

畦に出て隠居の爺の田植唄　栃木　飯塚キミ

目印の我が家の乙女椿かな　佐野　荒川　進

たんぽぽの絮の着地の風任せ　飯塚満里子

竹の子の香りもろとも御裾分け　売野　緑

里山を抜きん出てゐる山桜　金子恵子

夕暮のしじまの森のちよつとこい

青空を映し代田の水匂ふ

川風に紋白蝶のどこまでも

転ぶ子のしつかり握るつくしんぼ

菜の花の中洲へ鷺の舞ひ降りる

行く春の土手に唱歌を口遊み

菜の花の埋め尽くしたる川原かな

川風に吹かれ白鷺翔ちにけり

テレワークの窓に旋回夏燕

城跡に今朝も来て鳴く鵑かな

ピザ窯の煉瓦積む手に天道虫

菜の花の土手をスキップ貝塚へ

しやぼん玉飛ばす子追ふ子声弾む

河鹿鳴く里は災害復旧中

三毳山夏鶯の朗らかに　佐野　木村君子

豌豆の蔓背丈越ゆ家籠　黒川しげ子

夫の忌や大輪の薔薇咲き初むる

たんぽぽの絮のゆくへを知らぬまま

軒端より能面打つ音風薫る　齋藤ミチ子

ピカピカに靴磨きたる薄暑かな

蒲公英の綿毛吹く子の口まろし

春耕の後を五位鷺離れずに

花あやめ正造生家の中庭に　関口かつ子

花筏つぎつぎ縫うて真鯉かな

朝の日に輝く芽吹き三毳山

チューリップ行き交ふ人のみな笑顔　高田貴子

菩提寺の庭の黄牡丹浄土かな

黄牡丹の穢れなき黄と思ひけり

老鶯や大寺の秘むる七不思議　店網洋子

すつと伸ぶ薔薇の若枝も棘も赤

要黐の新芽眩しき新居かな

麦は黄に遠き浅間山のうすうすと

名水の流れ海芋の白さかな　仲山さよ子

草若葉一跨ぎする田川かな

夕雲雀名水豆腐ぶらさげて

花吹雪ラリーはづませテニスかな　佐野　菰原美穂子

芽柳やペダル踏む子を父追へる

青麦の風にたはむるリズムかな　松田富夫

老鶯や石切る音の裏筑波

巣立鳥胸毛吹かるる松の枝

子燕のわつと大きな口並ぶ　義本美智江

隠沼にくつきり映ゆる春の山

天を衝くメタセコイアの若葉かな

夕映えの枸橘の花ほんのりと

母ゐぬ間いぢめて楽しかまど猫　古河　青木正男

磯原は雨情の里や早稲の花

おくるみの乳の香甘し花まつり

春嵐去りし夕べの地震かな　さいたま　須藤初枝

プードルのシャンプー見てる四月尽

大鴉我と向きあふ桜時

若葉打つ雨音やがて激しかり　和光　板垣陽子

また腕の細くなりしか更衣

色違へ姉妹のやうや花水木

鯉幟カートを押して城下町　新座　多田英治

薔薇咲いて少女のやうな妻であり

風薫る新宿ボルガの芸術談

立ち枯るる巨木を覆ふ蔦若葉　川越　岡野輝子

藤の花ゆつたりと香を放ちけり

文庫本横切る蟻を目で追へり

菖蒲湯や八十余年息災に　黒木敬子

青澄みて秩父連山山笑ふ

石垣に並びて咲ける著莪の花

曇り空に紛れてしまふ桐の花　津金房子

久々に日の目浴びませ武具飾る

狭山茶の原木八十八夜かな

木の幹の樹液をなめる四十雀　常見イツ子

空仰ぐ遠くより見え桐の花

雲雀鳴く青空うつす水たまり

若葉雨天海像を洗ひけり　山本敦子

くづれ初めし牡丹ことに匂ひけり

若葉風母命日に曽孫生る

新緑や岩盤浴へ莫蓙かかへ　坂戸　守山勝江

三味線によされ踊りや夏津軽

卯波見に下る坂道芙美子の碑

谷若葉いつも何処かが濡れてをり　千葉　大月玲子

母の日の空鉢今も庭隅に　岡野惠美子

飛魚飛んでその先遥か壱岐の島　喜多恭仁子

初取りのはうれん草の根の紅き　高田みや子

友人にラインで送る八重桜　松浦陵保

若駒の肌つややかに風光る　柳澤道子

たんぽぽの絮飛ぶ休校中の庭　佐倉　新谷八郎

人まばら銀座の柳芽吹きたり

夏兆す浜にステイホームの文字

万緑の風や撮り鉄待ち時間

母と観し雷蔵映画立葵

疫病禍(えやみ)のやたらカタカナ梅雨の雲

朱と金の秀衡塗りや春の膳

奉納の子供草鞋や風光る

シャボン玉逆さに映すこの世界

薫風や遠回りして草の道

低気圧雲騒ぎ出す花水木

菜の花の群れ咲く風の黄色かな

走り行く喜びの声田水張る

保育園の午後の静寂郁子の花

てふてふの舞ひ行くみちや荷風の忌　佐倉　有泉正夫

昭和の日鯛を炙る電熱器

春深し鶏小屋修す用務員

道産子の春のたまものアスパラガス　杉田富美代

花供へ父母姉想ふ彼岸かな

かがり火のごとく燃ゆるよ紫木蓮

雨の中ゆらゆら揺るる雪柳　鈴木隆久

チンドン屋の白塗り剝げし遅日かな

糠雨に包まれ海棠花あかり

腹這ひてなぞるくづし字長閑なり

大縄の子ら囃されて山笑ふ　鈴木美根子

蒲公英の絮飛ぶ先や夢の国

春雷や顔うづめたき母の胸

猥雑の街ぞ恋しき夏立てり　竹内　実

変はる世やドヴォルザークを聴く端午

ひき回す牛に曳かるる代田かき

遠きより赤き鶏冠の雉かな　立原千代子

まん丸の蒲公英の絮風を待つ

水温む波立ちはじめ櫂の音

九十九里目刺の香鼻につく　米田敏子

糠漬に豆御飯ある夕かな

夏やせて指輪するりとぬけ落ちる

茎立のうすむらさきの花となる　習志野　清水礼子

ひらひらとひらひらと黄の初蝶来

誕生を告ぐる電話や緑立つ

チューリップ綾子先生の偲ばるる　船橋　近藤澄子

目の前を雉子の過りておどろきぬ

しばらくは桜吹雪の中にをり

道の辺の菫の深き色愛でし　近藤澄子

落下する雲雀のはやさ紫雲英野に

蒲公英の小道を歩きなごみけり

コロナ禍やブラウニングの春ならず　山口秀吉

北の地と見紛ふ総の君影草

世間大変鳥語変らず春歌ふ

春雷や時疫の空を一喝す　柏　鹿毛満子

筍を抱へて帰る寺詣で

休校のプールにボールそのままに

記念樹の子等は二十歳に桃の花　村田由美子

春かなし暦の色の華やぎて

壁掛けに薬の仕分け花の冷

一斉に頭刎ねられチューリップ　松戸　石川幸子

手ぶらにてぞくぞく帰る小蟻かな

麦の秋自転車停めてしまひけり

寛永の庚申塔に桜しべ　菊岡緋路

花冷や地球を覆ふ厚き雲

この牡丹仄かに青く匂ひたる

日の暮の小暗き参道濃山吹　渡部洋子

新宿のビル群光る春日かな

リラの風ピアノ洩れ来る夕べかな

髪切つて春ショール手に今日卒寿　市川　奥澤よし江

葉桜や水音踏んで風が来る

戻り来て家主を見遣る蜥蜴かな

花水木彩りのよき並木かな　東京　石山風童

喘ぎあへぎ登る急坂花馬酔木

山法師五重塔を下に見て

満開の花の奥より鵯の声　岡村純子

花筏たゆたふ川の岸をゆく

真つ直ぐな畝の広がり夏近し

コロナ禍を憂ふ令和の花の冷え　北口富栄

鎮魂の飛ばす風船青や白

山門へ大伽藍へと囀れり
あさまだき雉のひと声してゐたり　東京　草間三香子

黄蝶の四つもつれて見失ふ
電線の鴉の狙ふ目高の巣　桑原優美子

紫陽花やうすむらさきの毬揺らし
開け放つ換気窓より蠅の入る
万緑や日ごと見てゐて色かはる
春雨や路地に漂ふ茶の香　小池清晴

路地裏の旧き祠や花なづな
杭の上向きを違へぬ都鳥
出棺の遺影ほほ笑む花吹雪
傷癒えし海豹海へ帰りけり　小池宗彦

縄文の竪穴住居蕗ばんば
てのひらに外郎五粒春深し
健やかに大正生れ花菜漬
窓あけて隣家のラジオ聞く五月　高野翠子

昼に炊く竹の子ごはんテレワーク
垣根越え我家に向きし白牡丹
大樟の枝わさわさと青嵐
参道をしやかしやかと掃く立夏かな　田崎京子

新緑に教会の鐘冴えわたり
初夏や絵馬鈴なりの将棋堂
ランチメニュー筍飯の大き文字　東京　中澤桃子

アンコール薔薇台に置く指揮者かな
美濃焼の白き小鉢や木の芽和
蕗を煮る匂ひや路地の暮るるなり
柿若葉家中の窓開け放ち　馬場美智子

むらさきの丈揃へけり花菖蒲
雨音のふいに止みたり桐の花
竜巻の警戒速報ねこの恋　平子甲奈

路地裏につばめ子育て中の文字
薄日映ゆいろはもみぢの若葉かな
日枝の杜ふくらんでをり立夏なり
爽爽と葉桜の樹より風生まる　福田ふみ子

葉櫻や鹿の子模様の陰を踏み
春キャベツグローヴの様な葉をはがし
特攻を偲びつ知覧の新茶呑む
落栗の割れ目にのぞく若芽かな　藤田信子

子烏の頭の逆毛のやはらかさ
金星の瞬き強し立夏の夜　本多　葵

昭和の子卒寿を生きて昭和の日　東京　松野寿美代

春キャベツさくりと割りてみどりの波　松本幸男

電柱の巣に忙しき親烏　三村紀子

軋む櫓にしぶく水面や風光る　宮崎正義

たわわなる光や雨後の朝桜　宮脇秋峯

せせらぎや飛べぬ子燕橋の下　砂地宏子

大藤の浪間漂ふ羽音かな　中ノあさ子

棚朽ちて地を這ひうねる藤かづら　武蔵野　国分寺

薫風に鼻先伸ばすめしひ猫　

花筏二人の舟を囲みをり　

春雷の雨にぎやかにトタン屋根　

色淡き木の芽に雨の祖母の里　

故郷のあの山この山笑ひをり　

飼ひ犬の又も嗅ぎゐるつくしんぼ　

秩父路の一軒屋に高く鯉幟　

鳥毛立女図の屏風や八重桜　

重なれる若葉の下の瀬音かな　

一本の蒲公英揺るる殉難碑　

昨夜の雨払ひ日招く白こぶし　

池の面のさかさ樹に春の雨しとど　

菜種梅雨公園にポツンと滑り台　横浜　阿部トキ

雉子鳴くやころがしてある大丸太　

春満月黒く波打つ瓦屋根　大駒泰子

音立てて八十八夜の雨雫　

隣まで春田十枚屋敷林　

蜷の道ト音記号を描きをり　加藤和子

白壁に紛れてしまふ梨の花　

正調に鳴いて老鶯かげを追ふ　

着いた荷に秋海棠の種袋　後藤晴子

朝の日に藤の房先雨灯る　

大き影残し高みへ初揚羽　

ジャムを煮る頭上はなれぬはたた神　柴田雅春

病葉や青空うつす小流れに　

赤黒く残る紅葉や雨の寺　

草倒れ庭の隅々冬ざるる　鈴木律子

山茶花の雨の滴をはじきたり　

葉桜や火花とび散る町工場　長野高朋

青鷺の身じろぎもせぬ雨後の堰　

親の水脈子が追ひかけて鴨涼し　

せせらぎに小魚の影水温む　

内裏雛嫁ぎし吾子よく似たる　長嶋和子（伊勢原）

草餅や河原に遊ぶ子等の声　本島　廣

曳船の航跡の泡海霞　三木豊子（横浜）

春燈に形見の大島広げたり　山本カツ子

徴の靴断捨離の荷に加へたり　秋山憲三（秦野）

田植待つ田は一面の水鏡　青木明代（川崎）

花満開モデルハウスに人絶えず　古谷悠紀子（松田）

花菜飯弁当警備員の遅昼餉　藤森利子（松本）

花水木雨の小道を照らしけり　江口嘉郎（甲府）

唐様の舎利殿光る新樹かな　安田良子

六十年住みし狭庭や蕗の薹　横山ユキ子

つつじ燃ゆ腕組む像の力道山　中谷由郁（大和）

更衣風にふくらむワンピース　久保田富士子（茅ヶ崎）

一本の茄子の苗植ゑ豊かなり

猫逝きぬ爪跡幹に桜咲く

潮騒や挙り競ひし松の芯

阿夫利嶺の晴れ間プチプチ苺摘

落椿並べ飾らん猫の塚

切通し妙に紅きや藪椿

神頼み邪鬼払ひませ菖蒲の湯

叱られてふらここ風にギィと泣く

梨花の風猫の集まる道祖神

切開の首にピンクの春ショール

田起しや鴉従ふトラクター

田を植ゑて犬駆け回る小昼どき

家の灯の映る水田や遠蛙

爛漫の花より透ける富士白し

紋白蝶犬の散歩の後先へ

初つばめ鯉の背掠め宙返り

木の股で引きて檜の芽摘みにけり

講宿の庭に三椏お亀の像

木瓜の花土手に張りつく切通し

ミッキーマウスのごと蚕豆の花笑ふ

ひそやかな忌日ありけり散る桜

世はなべてコロナ籠りや蕗を煮る

花筏過ぎし湯川や泥の色

湯川沿ひ高き石垣緋の牡丹

桜蕊踏み締め歩む湯川沿ひ

大菩薩花の雲より富士の山

八ヶ岳切り裂くやうに初つばめ

泥付きの筍提げて飲み屋街　　杉山美紀子（静岡）
雲梯に飛びつく少女揚雲雀　　高橋一夫
行く春や日の斑に遊ぶ鯉の群　　田中秀幸
著莪の花参道いよよ男坂　　筑地裕子
あしかびやペンキはがるる水深計　　内藤允昭
堰を越え川藻をあさる残る鴨　　本多ひとみ
林中の明るき所花樒　　望月南
膝折つて土筆を摘めり本丸に　　春野菜掘抜きの水無尽蔵
春寒や観音の首傷走る　　花吹雪ほろほろ浴びる池の縁
花曇地蔵の顔の傾ぎゐて　　踊子草挿せば野の香や厨窓（焼津）　小梁洋子
啓蟄のダム湖に水の戻りたる　　樟若葉修理始まる大社
雛飾る母に教はる並び順　　伐木の庭浄めけり夏の雨
今朝の日に三椏の花黄を深む　　地球儀の海の碧さよ新入生（川根本）　鈴木裕一
桜蘂善元公の墓打てり　　初蝶や茶畑の畝を旋回す
春筍や嵯峨野の友のおすそわけ　　父植ゑし桜散り初む父忌日
畔を塗るすひつく鍬を引きはがし　　ただ寂と椿は落ちず渓ふかし（津）　瀬野喜代子
山葵田の水の光を浴びにけり　　たんぽぽの絮のまんまる崖の上
ふらここへ羸痩（るいそう）の身を委ねたる　　飛行機雲のふたすぢ遥か皐月晴
病床の受話器に聴ける初音かな　　若葉から青葉へ山のふくらめり（金沢）　臼村喜久代
桜えび豊漁祈る由比の浜　　ひつそりと緑雨にけぶる大師堂
初咲きのあやめを供華に忌日かな　　高木艶子
手でほぐす土にも春の匂ひかな　　腰曲げしまま歩き出す草取女
がうがうと風の生まるる竹の秋　　片隅のたんぽぽ残し庭手入　　田上ナツ子
山裾の父のふる里田水張る　　池濁し寄り来る鯉や木の芽風

勇ましくをとこ薇拳上ぐ　金沢　廣田宏美

選ぶつくる食べる楽しさ黒目張　松田好子

摘入汁パンと叩きて山椒の芽

パンデミック街騒消えし子供の日　宮崎惠美

草いきれ鼻すぢ通る濡れ仏

幼魚の群すばやく過ぎる夏初め

農具小屋うしろ崖なす竹の秋　谷内瑞江

雨に倒れ雨に起くるや黄水仙

志賀は春船上で買ふ葦の笛

春蘭や能登の笹原通りぬけ

倒木の間に片栗花咲けり　鶴尾正江

片栗の花や入山禁止札

朝に夕に豌豆の蔓伸びに伸ぶ　白山　朝倉みゆき

新茶の香ひそめて届く案内状

パソコンで孫との対話柏餅

糸ざくら土塀に影の揺れどほし

山桜川底までも山桜　敦賀　前川千代枝

初物や筍飯に弾む箸

近江路や紅殻格子に新茶の香

花うつぎ茅葺屋根の鯖街道

千枚田植ゑて見下ろす日本海　敦賀　山本一枝

連翹やあたり一面明るうす

うつむきて片栗の花風を聴く

フラミンゴ湖ときいろに水温む　大田ふじ枝

隠岐の牛黒光りして聖五月

羅を着て祇王寺を小走りに

青蜥蜴無宿の墓にかくれけり　川口和代

柳絮飛ぶ頼朝偲ぶお鬢水

湿原を見下す崖の花辛夷

藤咲いて鹿の角干すきこり小屋　田嶋豊年

来ぬ人を待ち草臥れて散る桜

門柳のれんの懸かる菓子處

パノラマは剱立山チューリップ　中川雅月

朧なる女人高野の古塔かな

まだ続く牛の咀嚼や草朧

離れ庵庇を覆ふ花りんご　中村秀一

風光る耳に草木の話し声

牧開き山を仰ぎて牛啼けり

降り止まぬ小雨に池の灯も朧

植木市おやぢは奥でにぎりめし　大阪　入山繁幸

鯉幟弟鯉が仲間入り

クレーンの緑十字旗青葉風

濃く淡く産土神の杜夏近し　明石　前島　幸

病窓を横ぎる速さつばくらめ

黒々と枝をあらはに花の雨

花筏崩して子鴨飛び立ちぬ　徳島　林　早苗

球追ひて桜吹雪の中にあり

ギャラリーに友の絵探す春隣

城濠の魚飛び跳ね花見かな　平岡　功

金縷梅の黄色に適ふ空仰ぐ

お鶴とお弓別れの段や竹の秋

花愛でてコロナウイルス忘れけり　山本晴美

産土の川埋めつくす花筏

父と母逢瀬重ねし花の下

墨を吐きのちの沈黙子は蛸に　石井　木内マヤ

代掻を待てる田水のあぶく立つ

ギヤマンに添へるネイルの細き指

藤の房狐の尻尾やも知れぬ　小松島　岡田あゆみ

言ひ返す言葉がなくてレタス噛む

荒れし手にせめてマニキュア木の芽風

ポケットの底にのどあめ若葉寒　福岡　相本和子

診察の待たるる窓に初の蝶

新緑の窓あけはなちナース行く

初旅や亡妻と訪ぬる白川郷　石原好宏

快晴で迎へし朝や夏に入る

新緑の山を覆ひて瑞々し

若竹や乳飲み子の笑み力なり　園田清子

若葉風手料理持ちて逢ひに行く

春満月地球の騒ぎ如何せん

蛇の子のとぐろ愛らし鉢の下　鶴田輝代

ひとひら又ひとひらと散る朝桜

卯月の闇金星三日月ランデブー

春の雷かぞへ再び眠りけり　那珂川　髙山ひさ子

蔓に蔓からませ揺れぬ豆の花

空き地より祝詞聞こゆる五月晴

春雨や木魚の音のぽくぽくと　長崎　永田美知子

畦道に紫雲英広ごる蔵開き

瀧の音百年聞きし樟大樹

濃き翳を石に映して夏の蝶　西海　山下敦子

その下で母子遊ばす柿若葉

コロッケのかりりと揚る五月かな　那覇　砂川道子

グーギィーギ番の鳩に夏若し　札幌　石田　睦

稚熟寝姫ひあふぎの花咲けり　多田陽子

踏み入ればくるぶし隠るクローバー　藤原善明

春夕立楡の木陰で雨宿り　吉田克己

初物のアスパラガスの甘さかな　斎藤ヨシ

散り敷きて花の絨毯すきまなく　佐藤シズエ

本堂に落花舞ひ込む朝勤行　島津治子

春昼や広場でひとりボール蹴る　稲川清子

春の空飛行機雲の行方かな　北井茂子

雪囲ひ解かれし枝の背伸びかな　鶴田智美

水芭蕉帆の膨らみや木道脇　西村サカエ

芍薬の大輪の白極めけり　新潟　齋藤　信

新樹雨トラクターの泥流しをり　小林あけみ

気合入れ家の回りの草を引く　入河　大

筍を茹でる大鍋出番かな　槐島　修

鰯饅朝餉にのぼる故里や　安藤美酒々

若葉風通る本堂お斉食ぶ　石井登女

春鴨や橋を渡りて小買物　斉藤孝夫

青空の真下に開く花水木　石田　睦

夕食に添へ天ぷらの柿若葉　芳賀

廃校の門に満開八重桜　北井茂子

ただいまと軒先に鳴く初つばめ　鶴田智美

垣根越え背のびしてゐる鉄線花　西村サカエ

薔薇園の閉ざされし門香の重し　酒々井

景章忌棗嫩葉のそよぎたる　入河　大

春筍を刺身と言うて手向けたり　船橋

転勤に上野の桜見ておけよ　槐島　修

全容を次に花弁見る桜　安藤美酒々

雉鳴けり鎮守の杜の昼さがり　石井登女

尾をゆらし飛行を待つやこひのぼり　東京

カーネーションブラジルも花卉盛んてふ　斉藤孝夫

大川の風に吹かるる桜餅　鶴田智美

春寒や一望のビルつつむ闇　西村サカエ

柏餅ゆるり解凍供へをる　斉藤孝夫

似顔絵がスマホで届く子供の日　鶴田智美

ガーベラを愛づるは我と昼の月　西村サカエ

一面に土筆によきによき休耕田　鶴田智美

まな板に残る紫蘇の香夏は来ぬ　西村サカエ

青葉風冷やり頬に心地よく　鶴田智美

曇り日のつつじの花の紅冴えず　三鷹　南場雅子
たんぽぽや花壇の隅に伸び居たり　府中　竹村晃子
紫のジャーマンアイリス気高くて　国立　阿部幸子
風さそひ卯の花くだしとなりにけり　日野　渡辺八枝子
囀りを包み込むなり大一位　横浜　奥野周光
しづかさに目白の声の降るごとし　静岡　大石弘子
風薫るりすの餌食むねずみかな　松本　藤森利子
紬着て丈の短かと新茶汲む　鎌倉　佐藤千晴
燦然と風にゆられて黄の牡丹　静岡　矢野喜久江
親子づれ色とりどりのマスクして　金沢　北野陽子
里山の足元横切る蜥蜴の子　長崎　下見直哉
落椿椿山荘の冠木門　坂本具子
メタセコイア筆の穂先のやう芽吹く　豊美佐子
寒暖の激しき日々や桜咲く　新出祐子
開けて窓早く逃げよと春の蠅　道場啓子
母さんより二歳越えたよ蕗の筋　保田ひろ
梟の声絶え郭公鳴く夜明け　宮田千恵子
花筏緩き流れの湯川かな　老山師たかんなぽいと放り投げ
竹の皮脱ぐや川音高まりて　城壁へ浮かび上がれり蓮の花
雨上り鳥語飛び交ふ村の春

若葉風温い指先くちもとへ
空高く雲雀の声のふためいて
紅牡丹崩れさうなり手をそふる
庭に咲く卯の花ささげ墓まゐり
全身で受くる子重し野に遊ぶ
花房の清しき甘さ深呼吸
水仕とめ今上り来る春満月
声のなき園庭過る藤の風
外出も出来ずに庭の大牡丹
マスクかけし人見違ふる五月晴
穏やかに葉擦れの音や春深む
雨後の雲間に春の月は銀

新入会員のご紹介

村上明弘（横浜）

万象作品の佳句

飛高隆夫

病院はノアの箱舟麦の秋　謝花寛営

この句は感染症による一連の騒ぎが背景にあるだろう。「ノアの箱舟」は、旧約聖書創世記が伝える。神が悪に満ちた世界を裁き洪水を起こして絶滅させたとき、ノアが神の示しによってつくった箱舟。ノアはその舟に家族と一対ずつの動物を乗せて難を逃れ、洪水が引くと神はノアと子供達と共に生き残った動物を祝福し、彼等は新しい人類の祖先となった、という。今回の感染症の騒動では、特に医療従事者の苦闘・奮闘が話題になっている。病院がかつてのノアの箱舟のように、感染症以後の世界への新しい出発の導き手とならんことを、という祈りの一句。「麦の秋」はおりからの季節とともに、その豊かな実りのイメージはこの句にふさわしい。作者は那覇の人。

幸せは笑顔に来るとチューリップ　山本瑤子

細見綾子先生の〈チューリップ喜びだけを持つてゐる〉はよく知られている。チューリップと対話し、その本質を認識し、即興的に表現した、即物具象の句である。作者は綾子先生の句に感動し、自らもチューリップと対話し、チューリップの語りかける言葉を聞いたのである。作者は徳島の人。

ものの芽や毛のやはらかき絵筆買ふ　小板橋泰山

「ものの芽」は木の芽も草の芽もひっくるめて、いろいろな芽の総称であるが、この句の場合、春の訪れをいち早く気付かせるうれしいものという意味合いではないか。ものの芽の出現に春の気配を見て取った作者は、その淡い緑の明るさを表現するに相応しい「毛のやはらかき絵筆」を求めたのである。作者は横浜の人。

人も車も風もなき街蝶の昼　田上幸子

新型コロナウイルスによる感染症の騒ぎを背景にした句であろう。政府から外出自粛を要請されて、めっきり人影が少なくなった街から、作者は人も車も消してしまい、風さえも止めてしまった。そして、その静まり返った空間には、多数の蝶が舞っているのだという。ひんやりとした超現実的な美的空間の出現である。作者は小松島の人。

玩具買ふこと思ひ立つ子供の日　大林彬彦

子供の日であることに気が付いた作者は、続いて、そうだ、玩具を買おう、と思い立ったのである。作者は七十代前半。欲しいものがあったわけではない。誰かのために買おうと思ったわけでもない。いったい何を思ったのか。作者は自分の心をいぶかしんだであろう。もちろん、思い立っただけで、

何も買わなかったに違いない。作者は調布の人。

人絶えてひそかに風の薫りけり　岡　元枝

作者はどこに佇んでいるのであろう。身の回りから人の気配が消えたことに気付いた作者は、同時に風の薫りに気付いた、という。そのような時、人は「自然」と心が触れ合ったような思いにかられるものである。それがひそかなものであればある程。「人絶えて」「ひそかに」の「ひ」の頭韻もひっそりと働いている。作者は横浜の人。

しばらくは空を遊びぬ花吹雪　内田節子

吹く風にどっと舞い上がった桜の花びらが、一塊として、舞い、やがて次第にてんでんばらばらに空から散ってゆく。その花吹雪は「空に遊んだ」（空で遊んだ）と見えるが、作者は「空を遊んだ」のだという。つまり、空の広さを味わい、解放感を楽しんだのだという。桜の花に深く身を寄せた理解といえる。作者は船橋の人。

万緑や赤き布靴歩き初む　野田成夫

中村草田男が、王安石の「万緑叢中紅一点」という詩句の「万緑」を用いて、〈万緑の中や吾子の歯生え初むる〉と詠んでから、「万緑」が季語として定着したことはよく知られている。掲句では歩きやすいように布で作られた靴を履いて、歩き初めた幼女の姿が描かれている。草田男の句では歯の白さが、掲句では赤い布靴が「万緑」に対比されて、それぞれの生命感を伝える。作者は松戸の人。

落ちしまま地に定まれり紅椿　荒井　仁

よく知られているように、椿の落花は花びらが散るのではなく、一花がそのままぽとりと落ちる。地に落ちてそのまま落ちた場所に落ち着いている。この句は、その落花のようすをそのまま写生したものだが、「定まれり」という表現により単なる写生を超えている。作者は調布の人。

以下、三句組から。

鳥毛立女図の屏風や八重桜　砂地宏子

「鳥毛立女図の屏風」は正倉院御物の一つ。唐風の豊艶な樹下美人図が描かれてある。八重桜からその美人図を連想した一句。原作は「鳥毛立女屏風」。作者は武蔵野の人。

卯波見に下る坂道芙美子の碑　守山勝江

「坂道」、「芙美子」（林芙美子）とくれば舞台は尾道。「卯波」は瀬戸内海の波。旅情溢れる一句。作者は坂戸の人。

千枚田植ゑて見下ろす日本海　前川千代枝

山坂を上へ上へと、狭い田が階段状に上って行く。田植え作業は大変であるが、一番上までの作業を終り、見下ろせば日本海が見える。作者は敦賀の人。

生活の詩としての俳句心

北海道支部

北海道はコロナウイルスの余波で、苦戦を強いられましたが、会員は士気を失うことなく、支部結成以来の変則的句会活動にも耐え、それぞれが「俳句心」を育てています。

会員十五名、同人九名、計、二十四名の陣容で活動しています。令和元年、大内マキ子さんが「万象俳句賞」を受賞し、大いに気を吐きましたが、会員の中には、年間三十六句以上の入選組が凌ぎを削っている状況で、頼もしい限りと思っています。特筆すべきは、中鉢弘一さんが、令和元年度の新人賞に決定。喜びが重なりました。

さて、コロナ対策で句会が出来ない現状をどう捉えるか。「句会が無くても俳句を作る」「句会が無ければ作らない」前者は自発的、後者は義務的です。勿論、正解はありません。

しかし、いずれにしても気持ちを「俳句モード」にしなければ一句が出来ません(私の場合ですが)。闇雲に名句が浮かべば天才なのですが、それは無理。時々惰性に陥るのを反省しています。そんな時「俳句は生活の詩」と思う事が救いとなっています。俳句はつくづく「座」の文芸です。一人一人の「生活」を詠みましょう。そして句友の個性を尊重し、共に学ぶ喜びを大事にしたいのです。北海道支部は「生活の詩」としての「俳句心」を育てて、新しい生活感覚の俳句を目指します。

(松原智津子)

新人加入で句会に活気

新潟県支部

新潟県支部結成から数年も経たないうちに、歴代の支部長三氏が相次いで亡くなられ、さらに、もう一名の同人が県外へ転居という支部にとっては将に青天の霹靂のような事態に遭遇した。残った同人は、佐藤三男、森山暁湖、佐藤雄二の三名。その後、髙橋ひろ、川村みよきの両名が加わり現在五名。各句会の幹事三名を含め、支部の年間行事である新年俳句大会、三句会合同の吟行会等の計画実行に当たっている。

今年に入って新型コロナウイルス感染防止の緊急事態発令により、四月から通信句会を続けている。高齢化による会員の減少は御多分に洩れず支部結成当時の三十数名から、現在三句会で二十二名と減少した。この現象は今後も続くものと思われる。

そんな中で明るい話題として、河交句会主催で俳句教室を開催したところ、三十数名の出席者があり、うち、四名の方が入会された。この内三名が四十代前半という若さで、句会に新風を吹き込み、中心になって活躍している。内、一名は昨年、内海主宰のご尽力もあって、「万象」に入会。今年に入って連続三句入選を果たしている。

会員獲得の一手段として、俳句講座の開催なども有効ではないかと考えている。今は、何よりコロナの収束が一大関心事である。

(佐藤雄二)

コロナ禍の早い終息を

栃木県「栃の葉」

連日、新聞・テレビ等で新型コロナウイルスの感染者の状況が報道される中、身の回りの今後のことに心配が募るばかりで、俳句を詠む余裕すら欠いてしまう程である。

「万象」俳句栃木句会では、佐野市の城山記念館、他各地区の公民館を利用している。宇都宮市、芳賀町も同様である。

三月二日から四月、五月と句会場が休館になってしまい、その先も不安である。長年、何の支障もなく句会を続けてきたことが、突然ストップになったことに戸惑いを感じた。

先ず、吟行句会は年間のスケジュールが決まっているので、三月から五月まで取りやめる事にして、吟行地の句会場のキャンセルの連絡から始まった。

不要不急の外出自粛ということで打合せは不可能となった。とにかく、各句会の指導者の許へ個々の俳句をファックスか郵便で送ることにした。通信句会が出来るところと、会員が多い句会では句の集まりが一定しないので、指導者が添削をし、個々に戻す方法で行う事とした。

俳句は座の文芸である。相対しての句会であれば、疑問の句について、細かく聞く事が出来るが、電話の遣り取りとなると内容を掴み取るのに難渋する。また電話では多くを語れないものである。一日も早いコロナ禍の終息を願う。

（亀田やす子）

新たな「座」を求めて

浦和句会

新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、句会も不自由を忍ばざるを得ない事態になりました。自粛要請や緊急事態宣言が出る前の二月から、今日の事態を想定して、浦和句会ではそれまでの形での句会の中止を決めました。

その後、現在に至るまで、オンラインを中心とする句会に切り替えて行っています。パソコンの使えない同人・会員とは郵便によるやりとりとなりました。

期日までに五句を幹事に届け、幹事がとりまとめた作品一覧を配信し、同じく期日までに選句した結果を幹事に送り、それを会報として発信しています。

飛高先生からは選された句についての寸評をいただき、いつもの句会の雰囲気を皆さんに味わっていただいています。

四月の句会結果には、幹事が「雑評」として、取った句や気になった句への寸評と添削例を加える試みを始めました。

座の文芸である俳句の要である「座」そのものがなくなってしまったことで、月に一度みんなが顔をそろえて過ごす時間が、いかに貴重なものであったかをそれぞれが噛みしめていることと思います。

今後はオンライン句会の中に、通常の句会の味わいを少しでも反映できるような工夫をしていきたいと考えているところです。皆さまのご健勝をお祈りします。

（中村千久）

新型コロナウイルスには負けない

千葉県支部

千葉県内に「万象」の句会は九つあるが、新型コロナウイルスの影響が現れた二月下旬以降、どんな対応をとっているのかを問い合わせたところ、全てが通信句会、電信句会との名を付け、句会を実施していた。これは、各指導者に「句会を途切らせてはいけない」という思いがあるのは勿論だが、もう一つ、会員の方に「自分の句を見て貰いたい」と同時に「他の人の句も見てみたい」という思いが強くあるからではないか。余談だが、そういう思いが俳句の上達とか句会の継続発展に繋がっていくのだろう。

県内の中央句会である千葉句会では、三月より投句を郵送・FAX・電子メールで受付けて通信句会を実施。参加人数が多いため相互選は難しく、三月は五名、四月五月は八名が選を実施、句会報は選の結果と句全てに作者名を入れて作成し、電子メール投句以外の参加者へは郵送を行った。

他の八つの句会も基本的には同じ方法での実施だが、選については会員相互、同人のみ等があり句会によって違った。一つだけ指導者のみの選があったが、そこでは指導者が投句全てに対しコメントを付けて返送を実施していた。

句会の楽しさは、句座を囲むことにあるのだが、それが出来なくても各句会の参加人数が変わらないのは、本当に俳句好きが集まっているということである。

（沢辺たけし）

無音の句会

東京支部　十七句会

新型コロナウイルスの影響が未だに続いている。不要不急宣言が三月十五日に、続いて四月七日には緊急事態宣言が発出され、自粛生活を余儀なくされた。

先ず中央句会の幹事さんから休会の一報があり、追っ掛けるように通信句会を行うとの連絡があった。東京には、近県の方も含め参加者の多い中央句会と同人句会がある。幹事さんの素早い手配により、中央句会に四〇名、同人句会に四六名の投句者があった。互選は難しいということで、選ばれた選者による選と短評が後日送られてきた。

現在、東京には十七の句会(内吟行句会が二句会)がある。それぞれの句会は一体この長い休みをどのように過しているのか、良い機会と思い、各幹事さんに電話で訊ねてみた。その結果、通信句会を行っている句会が六句会、希望者対応の句会が二句会、合わせると約半分になる。

休会としている句会には、「通信句会という方法もあります」と伝えたのだが、「みな高齢者なもので」と、言葉を詰まらせる場面もあった。

出掛けられない代わりに家での時間はたっぷり。この機会に「万象」誌を熟読し、郵便やFAXを利用して少人数での句のやりとりも可能だ。従来の句会方式にとらわれず、俳句を楽しむ環境を各自で工夫したいものだ。

（吉中愛子）

句会再開に向けて

神奈川県支部

新型コロナウイルス蔓延で自粛が求められた中、神奈川でも多くの句会は通信句会を実施して乗り切っています。

まず、句会の幹事に決められた締切日までにファックス、メール、郵送などで投句する。幹事は、投句された句の一覧表を作り、選句をしてもらい、句会報を作成して句会の方に送る。という手順のようである。句会によって投句数と選句数（七句、五句など）の違いはあるものの、指導者の添削や選評を添えてもらったりして、通信句会はふくらみをもってきました。緊急事態宣言が解除され、神奈川でも六月から公共施設が利用できるようになりました。句会が再開された場合は、各自が自宅で検温をしてマスク着用。施設の受付では氏名、住所、電話番号等の個人情報の記入が必要となり、手の消毒をする。室内では両隣の間隔をあけて、換気をしながらという感染防止の対策も。高齢の方もいらっしゃるので、句会ではマスクをして、距離の離れた座席では、補聴器の方は聞き取りづらくなり、さりとて大声は憚られます。都心を通る交通機関を利用しなければならない方もいます。何よりも、感染防止のためには不要不急の外出は控えるという基本の姿勢は変わっていません。従って、句会再開が待ち遠しい中、まだまだ、ハードルの高さを感じますが、再開へ向けてそれぞれの句会で検討を始めています。

（榎本文代）

コロナウイルス禍と句会

静岡「季節風」

静岡では現在「季節風」という合同句会報を毎月発行している。たった十八ページのささやかな冊子だが、２０２０年５月で２３０号になる。故淺場英彦先生が立ち上げ、私達に残してくださったものであるが、現在七十名の会員で活動している。淺場先生の『風』の僚誌であれば、どこに所属してもよい」という方針で、現在は「万象」「雉」「りいの」そして無所属の会員で構成されていて、順調に句会活動をしている。

現在、同人は二十二名（うち「万象」は十七名）年三回の「季節風」の編集会議の日の午前中に同人句会を行っている。しかし、この度のコロナウイルス禍により、四月の同人句会は勿論、当分の間通信句会になると思う。四月初め「季節風」として会長副会長連名で、各句会幹事宛に通信句会に切り替えて頂くよう手紙を出した。

中には「私は皆と会うのが楽しみで句会に行っている」とか、「公の会場が使用不可なら、自宅を開放するから家でやりたい」等色々意見を言う人もあったが、現状を理解していただき全句会、通信句会を行っている。幹事や指導同人は色々手間がかかり大変だし、句の講評も一行程度の短い文章になるので、十分な指導が行えないリスクはある。しかし、当分はこの体制で凌いでいくつもりだ。

（神田美穂子）

今だから日常吟を

石川県支部「あかね句会」

「家の中に居ては句が出来ないという人が多いが、いつまでも心に残る句の多くは、日常普段の句のように思う。日常吟を大切に」と、故中山純子師が常々仰っていた言葉が、今、しみじみ心に響いてくる。

「あかね句会」では、新型コロナ感染拡大で、不要不急の外出の自粛が言われ始めた三月初旬から通信句会を始めた。

二十四名の会員各自に、五句の投句を募り、集まった作品を三、四人で清記、コピーした作品集に選句用のハガキを同封し発送。回収したハガキによって点盛し、結果を全員に送る。少し時間はかかるが、このような方法で五月まで三回の通信句会を続けてきた。

外出の機会が極端に少なくなり、俳句と向き合うのはなかなか大変なことだが、この通信句会では、一人も欠けることなく投句があったことに驚きを感じた。どの様な方法でも、句会があるから俳句に打ち込むことができるという俳句ならではの効力に気付かされた。

やむを得ずの三か月の通信句会ではあったが、皆で顔を合わせての本来の句会のように、生の言葉でのやり取りがないだけ、実際の感触は伝わってこないように思った。一日でも早く通常の句会に戻れることが望まれる。

（中條睦子）

敦賀「万象」の現状

敦賀支部

敦賀「万象」俳句会は、石田野武男氏が指導され、現在に至っています。

句会は、毎月第一金曜と第三金曜日に開催。第一金曜の句会は、季節を問わない句を五句提出。第三金曜の句会には、会員が輪番で当季季題を出し合い、その季題に添う句を提出。いずれの句会も会員の選評を行っています。

毎年、三月の日能忌俳句会、四月の花換俳句大会、五月の曽良忌俳句会、九月の中秋観月俳句会や十月の「奥の細道」つるが芭蕉紀行全国俳句大会、十一月の墨直し俳句会などに参加している。六月には、ガス展示会に会員の句を展示。秋には、敦賀市文化協会主催の市民文化祭があり、俳句を出品。また、敦賀北公民館の文化展にも出品展示している。

以前は春と秋の二回吟行会をしていたが、高齢化に伴い、各自吟行をしている。近年、高齢化に伴う引退、死亡による減少と若年層の加入がないことが課題です。

敦賀市は、幸いにも新型コロナウイルス感染者は出ていませんが、「三密自粛の要請」により、三月から句会を休みにしなければならず、四月、五月とも句会は中止。その間先生方へ会員ごとに五句提出。添削していただいております。

会員数　十六名（男七・女九）句会会員（男五・女七）

（倉谷紫龍）

福岡の今

福岡「芙蓉句会」

福岡県には「万象」の会員が六名在籍しております。芙蓉句会の四人と個人で活動している二人です。

芙蓉句会では毎月一回、原則として第一水曜日の午後一時から三時間半、句会を開いております。芙蓉句会は「万象」の同人でありました井山幸子さんが、平成十三年十二月に立ち上げて、彼女の自宅を会場に句会を開催しておりました。会員数が最も多かった時は、七名ほどでした。平成二十八年三月に井山さんが亡くなられた後は、会場を福岡市男女共同参画推進センター・アミカスに移しました。当初は指導者が不在でしたが暫くして「万象」編集部のご配慮により、最初の数ヶ月は内海主宰に、その後は小林副主宰に懇切丁寧なご指導を戴いております。

芙蓉句会では、年に一度は一～二泊の吟行を、そして年に数回は太宰府天満宮界隈や福岡城址周辺などを散策して数時間の吟行を楽しんでおります。今年の月例句会は三月までは会場に集まっておりましたが、その後は、コロナ感染の懸念があって集まる事が出来ず、各自が自己責任で選句して「万象」に投句している状況です。首都圏では通信句会を開催しておられるそうですが、福岡でもそうした句会ができれば良いがと考えております。

（石原好宏）

コロナ禍の中で長崎の現状

長崎支部「鳴滝句会」

コロナ禍の前は、句会終了後、選句用紙に順番を付け、私の特選から順に句会報を作成していました。

三月からは、私の所へ会員より作品を五句から十句、メール又は郵送してもらいます。（コロナ後は仕事が増えました）

それをまず、一句ずつ吟味し、添削して整えた五句をそれぞれランダムに作者別に分けて清記し、パソコンで一覧表を作成します。作品の一覧表をメール又は郵便で会員各位へ送ります。一両日後に会員より選が戻ってきます。特選一句を選び、選評を添えてもらいます。並選は五句の作品の上に○印をつけます。パソコンの一覧表に会員別の点盛を作成します。点が多い順に番号を付けて、更に句会報へ順番に打ち込みます。句会報ができたらA4で印刷。それを公民館へ行き、B4に拡大印刷します。出来上がったら会員各位へ送付します。

長崎新聞の俳句担当者へ毎月メールで送付。「万象」誌の長崎の会員の作品は毎月一回、長崎鳴滝句会の作品は二ヶ月に一度掲載して頂いています。鳴滝西部自治会報には、毎月掲載されています。

コロナ禍と言っても、長崎では、大型客船の感染以外は、市中に余り問題はないのですが、自粛生活に変わりありません。長崎鳴滝句会を充実させたいと努力中です。（丸本祥夫）

楽しい句会

徳島県「なると」

徳島は、昭和五十年に「風」の四国の拠点として生まれた「なると」を母体としている。「万象」になっても同じである。

毎月第四土曜日に、福島せいぎ宅で句会が開かれている。参加者は「万象」会員を中心に十五名ほど。現在「万象」には、徳島県の同人四名、高知県の同人二名を含めて、十五名ほどが入会している。

徳島の風土は、お遍路さんへのお接待に象徴されるようにすべてに暖かく、おせっかい。よくいえば南国的である。高知のハチキンにはかなわないが、女性は開放的で明るい。

毎月の句会もにぎやか。黙っているのは選句の時ぐらい。私の選評が終わると、堰を切ったように質問が飛び出す。

今年の句会は、コロナ禍の影響で四月は休会したが、どこからか「やろうやろう」の声があがり、五月はいつものメンバーが集まった。世間では自粛中だが、マスクをしていたのは句会の最初だけ。机の上には、毎回、福島吉美さんの手作りの料理と菓子が並ぶ。句会の時から手が伸びる。ちなみに今月の句会は、いなり寿司、干柿、かしわ餅、大皿には山盛りのそら豆。お土産もいただいてニコニコと解散。

最近、「万象」誌上で徳島勢の活躍が目立っているのも、楽しい句会の成果かもしれない。

（福島せいぎ）

マスクの顔を上げて

沖縄県　ふう句会

ふう句会（筆者の句座をまとめていう）のメンバーは十四名程度で、他結社の句友も数名いる。

句座は吟行も含め月六回。昼間が土日の三回。平日の夜は「ふう」で食べながら飲みながら……。ただし、各自の仕事や家族の事情等で全員が集まる句会はない。其々が都合の良い句会に参加する。忘年会の乾杯には、なぜか全員集まる。

お陰で句会も吟行も密になることはほとんどなく、コロナ禍の中でも日を調整しながら続けることができている。

たとえば、四月のある日、車での遠い移動を避け、各自で那覇市内の公園に向い自由に吟行。昼食は持参のおにぎりとお茶で空の下。句会は広さ充分の「ふう」でコーヒーとケーキを楽しみながら数人で行った。いつも運転手役のNさんはとても喜んで、佳き句ができた（？）らしい。

ふう句会は自由でありたいと願っている。同じ花が咲く小さな花壇でなく、写生の大地に多様な草木や花が育つ場でありたい。他結社の句友との交流は大いなる刺激である。

沖縄は観光経済の県である。海外、国内からの観光客へ入島自粛を頼み日常を営むことは、我慢と努力を要する。やんばるの森も、離島の海も、そして那覇の空も変わらず輝いている。マスクの顔を上げて、感謝と労りの心を忘れずに平穏な日常が戻ることを願う日々である。

（前田貴美子）

俳句カレンダー掲載句自註

俳人協会発行の今年の「俳句カレンダー」には、万象から6名の方の句が掲載されています。作者それぞれの自註を順次ご紹介いたします。

起き抜けの青空眩し原爆忌　増田幸子

昭和十九年生れの私には太平洋戦争のことは記憶になく、父母や姉たちから「幸子はいつも母に背負われ防空頭巾は被りっぱなしだったよ」等々、聴いたが実感はない。況して広島市と長崎市の原子爆弾投下のことは、栃木の片田舎の大人さえ報道で知り得たことで、目の当りにした人は皆無だろう。

後に戦争・原爆のことは私なりに学び解った心算でいたが「黒い雨」の映画に言葉にならない衝撃を受け、被爆された方の心の奥に秘めた悲憤を知り、浅薄な我を恥じ入った。

掲句は十数年前その日の朝の、空の無垢の青さと強い日差しに、即生れた句。原爆忌の句はこの一句のみで作れない。

お詫びと訂正（7月号）

＊6頁　下段　後ろから2行目　春の雲→春の雪
　　正　両岸の花を引き入れ春の雪

＊33頁　下段　最後の行
　　出してしまいました。→出しました。

＊45頁　上段　後ろから2行目　平田功→平岡功

句集のご案内

原田しずえ 第二句集

草雲雀

四六判、上製本
二八八ページ
二千五百円＋税

師の許へ通ひし径や草雲雀

月山をすべり稲田の風となる

大枯野きて枯色の瞳かな

純真、篤実、善意などが、しずえ俳句の底流となっているが、今はこの上に円熟さ、自在さ、滑稽味が加わっている。

主観で対象をゆがめず、即物具象の写生で誠実にモノを捉えようとする作風は今も健在である。

「万象」主宰　内海良太

「万象」の皆様は有文社までお電話下さい。

有文社

電話042・475・0436

同人会便り

神奈川県の同人

榎本文代

「万象」神奈川支部には、小林愛子副主宰、同人会会長でもある柳澤宗正支部長と十七人の同人がいます。「風」から「万象」に参加された方が多いので、同人の年齢が高くなってきています。句会を楽しみに頑張られている方、「万象」への投句だけになられた方など、それぞれのライフスタイルの中で俳句と向き合っています。

句会は小林副主宰の指導される「横浜句会」「洪福寺句会」を中心に、横浜には七つの句会があり、それぞれの区域の同人の指導のもとで活動を続けています。

また川崎、伊勢原、茅ヶ崎の各市にも句会があり、足腰が大丈夫な方は複数の句会に参加されています。

この五月に三澤治子さん、故三澤いつ子さん姉妹の句集が出版されました。昨年は西本才子さんの句集が出ています。卒寿を越えても衰えぬ作句への姿勢は、高齢化を迎えている支部を支える底力になっているように思います。

昨年の「万象」全国俳句大会は神奈川県で開催されました。句会間の交流は殆どない中で、多くの方が協力してくれました。

そこで今年から年二回ほど支部全体の吟行句会をやりたいと話し合ってきましたが、しばらくは感染症のため自粛となっています。

珈琲ぶれいく ③

【問】今回も引きつづき「下二段活用」についての勉強です。正しい方を選びましょう。

1. しろがねの薬こぼ(るる・れる)良夜かな　野崎ゆり香

正解は「るる」。口語動詞の「こぼれる」は文語動詞では「こぼる」となります。ラ行下二段活用で「こぼれず、こぼれたり、こぼる、こぼるるとき、こぼるれば、こぼれよ」となります。下五の「良夜」という名詞につながりますから、連体形の「こぼるる」を使うことになります。「こぼれる」は口語動詞の活用形ですから間違えないようにしましょう。「こぼるる」とオ音とウ音が連続して余情を感じさせてくれます。

2. 雪の夜やひとり釣瓶の落(ちる・つる)音　加賀千代女

正解は「つる」。口語動詞「落ちる」は文語動詞では「落つ」となります。タ行下二段活用で「落ちず、落ちたり、落つ、落つるとき、落つれば、落ちよ」となります。ここでも下にある名詞「音」につながっているので、連体形の「落つる」を使うことになります。「落ちる」という形は文語での活用形には見当たりません。

今回扱った下二段活用動詞の連体形ですが、口語動詞の活用形と混同することが多いので気を付けましょう。

「万象」同人句会報

（5月例会に替えて通信句会）44名

内海良太主宰選

人失せて新樹がくれの銀座の灯　山本右近
山の色川のいろ替え夏来る　赤松郁代
鎌を研ぐ水に散り込む花卯木　小林珠江
休診に続く休診アマリリス　名和政代
水音や揺らぎどほしの花山葵　小林珠江
カーテンの襞の息づく薄暑かな　大久保進
ほととぎす鳴くや田水をひびかせて　内海保子
断捨離を決めかぬままの更衣　下嶽孝一
骨だけのビニールハウス麦の秋　奥　太雅
声をあげ巣に入れ替はる朝燕　西本才子
皿洗ふ音に紛るる夜の雷　柳澤宗正
行商の籠より出せりスイートピー　山崎郁子
一束となり捨てらるる土筆かな　原田しずえ
大塔の春満月を拝みたり　古川京子
目薬の朝の一滴走り梅雨　江見悦子
青胡桃谷の地層の露なる　佐藤嘉洋
声きゆるまで点となり揚雲雀　赤堀洋子
㊥卯波立ち星座のごとき島灯り　山本右近

卯波の句は日中の嘱目に多い。卯波は陰暦四月頃の悪天候で海や川が荒れ白波が立ち騒ぐ様子をいう。俗に白ウサギが跳んでいると例えることもある。句は卯波の奥の漆黒の島影に点々と点る灯が星座のようで幻想的だというもの。新しい取合わせの句。

㊥昨日より青くなりたる植田風　沢辺たけし

昨日、今日と青田を見て回ったのだろう。逞しく育つ青田から毎年パワーを貰うような気がして、あらためてここは、瑞穂の国だと認識する。風に色を付けた呼び方は季語にも多いが、青田を渡る風が、昨日より青さを増したというのは分かりやすい。

㊥まだ柔き色にて逃ぐる蜥蜴の子　赤堀洋子

蜥蜴の背中の暗緑や緑の縞は美しい。子蜥蜴でも背中には立派な模様を付けている（鯖の子も同じ）。全体的な初々しい感じを「柔き色」と感覚的に捉えたのがいい。子蜥蜴でも危険を察知してからの逃げ足はもう一人前、その素早い逃げ足が悲しくもありおかしい。

小林愛子副主宰選

蟇鳴いて田園の月潤みたり　古川京子
鎌を研ぐ水に散り込む花卯木　小林珠江
木に咲ける花みな白し聖五月　喜多尾明子
ほととぎす鳴くや田水をひびかせて　内海保子
薫風や誰にもあはぬまはり道　宮本加津代
緬羊の口よりはこべ垂れてをり　西本才子
㊥卓上にカミュの「ペスト」新茶汲む　内海良太

卓上に読みかけの本が置いてある。表題はカミユの「ペスト」。この題名から今、世界を席巻する新コロナウイルス感染症を思わずにはいられない。これを機に変わりつつある世の中だが新茶の味は特別である。ペストだって過去のものだ。人類の暗い部分と、いのち甦る新茶との対比が面白い。

江見悦子選

スコッチの氷金色新樹の夜　三屋英俊
休診に続く休診アマリリス　名和政代
翡翠の一閃映ゆるはけの水　佐藤晴子
骨だけのビニールハウス麦の秋　奥太雅
新緑の色を深めて雨あがる　久留島規子
あかあかと少し痩せたる夏の月　久留島規子
㊥廃屋の空がらんどう松の芯　中村千久

所々から空が覗けるような、年期の入った廃屋なのだろう。庭に植えられた松には、往時と同じく勢いよく松の芯が出揃い、空を突いている。リズムよく読み下せるのは、中七の「空がらんどう」のア音の響きから。がらんどうの廃屋の上はがらんどうの空。世の無常にも通じるが、それを諾っている作者の心根は明るい。

吉中愛子選

山の色川のいろ替へ夏来る　赤松郁代
薔薇の香のもつとも高きを友の手へ　小林愛子
卓上にカミユの「ペスト」新茶汲む　内海良太
休田の底よりとどく初蛙　広瀬俊雄
里山は川に展けて麦の秋　小林珠江
まだ柔き色にて逃ぐる蜥蜴の子　赤堀洋子
㊥電柱のやうな欅に若葉噴く　南雲秀子

若葉から青葉になる頃が欅は最も美しい。夏になって陰が濃くなると傍にあるベンチは街の憩いの場所となる。やがて冬の到来に向けて枝は容赦なく伐られてしまう。電信柱のように突っ立つ欅は見慣れてはいるものの毎年気になる。若葉が出始めると繁るまではあっという間だ。若葉の期間は短い。そこに焦点を当てている。

古川京子選

スコッチの氷金色新樹の夜　三屋英俊
卓上にカミユの「ペスト」新茶汲む　内海良太
灯台の崖の真下の花いばら　内海保子
緬羊の口よりはこべ垂れてをり　西本才子
奇声上げ烏の挑む青大将　内田郁代
えごの花こぼれて時を刻みたり　江見悦子
㊥卯波立ち星座のごとき島灯り　山本右近

春には温かく見えたかもしれない島に点在する人家の灯を、卯波の音を聴きながら、涼やかな一つの「星座」と捉えたところに作者の感性や浪漫性が想われました。遠くの灯台の灯りは一等星、島に半ば隠れている漁火は二等星などと、窓外の景に旅情をなぐさめている作者がみえました。

沢辺たけし選

山の色川のいろ替へ夏来る　赤松郁代
スコッチの氷金色新樹の夜　三屋英俊
木に咲ける花みな白し聖五月　喜多尾明子
新緑の色を深めて雨あがる　久留島規子
皿洗ふ音に紛るる夜の雷　柳澤宗正
まだ柔き色にて逃ぐる蜥蜴の子　赤堀洋子
(特)卓上にカミュの「ペスト」新茶汲む　内海良太

新型コロナウイルスが猛威をふるっている今、日本ではカミュの『ペスト』が大変売れているとのこと。作者も読んでいるのだろう。この句、緊急事態宣言の発出されている現在の厳しい状況を一冊の本に託して詠んだのが、功を奏している。勿論、季語の「新茶汲む」が利いているからこそだが。

山本右近選

山の色川のいろ替へ夏来る　赤松郁代
スコッチの氷金色新樹の夜　三屋英俊
水底に影遊ばせてあめんぼう　中村千久
抱卵の浮巣の鳰に雨激し　宮本加津代
新緑やベンチに禁密×印　大橋雅子
青胡桃谷の地層の露なる　佐藤嘉洋
(特)卓上にカミュの「ペスト」新茶汲む　内海良太

上五・中七の「卓上にカミュのペスト」が、昨今のコロナ禍による疫病籠りを象徴的に表している。そして感染の恐怖感や不安な閉塞感という重圧に対して、ステイホームの合間に汲んだ新茶にホッとするひと時の安らぎ感といったものとの、この二つの対比が見事に表現されている。

中村千久選

初夏の赫き満月昇りたり　内田郁代
鎌を研ぐ水に散り込む花卯木　小林珠江
木に咲ける花みな白し聖五月　喜多尾明子
カーテンの襞に息づく薄暑かな　大久保進
骨だけのビニールハウス麦の秋　奥太雅
緬羊の口よりはこべ垂れてをり　西本才子
(特)涼風や読書疲れの酒買ひに　山田春生

新型コロナウイルスの自粛で家籠りの日が続く。暇をもて余して読書に過ごす時間が多くなった作者。さすがに疲れて、日が落ちれば一杯やってみたくなる。涼風の立つ夕暮れの道を酒屋へ向かうのだ。風が心地よい。「読書疲れの酒」という表現……助詞の「の」がおもしろい。

お知らせ

▽中央句会8月例会に替えて通信句会　8月3日投句締切
▽同人句会8月例会に替えて通信句会　8月22日投句締切

詳細は各幹事にお問い合わせ下さい

東　西　南　北

消息等

「万象」一月号が、「たかんな」五月号の「他紙管見」に　小川三胡氏が、半頁にわたって丁寧に紹介。主宰作品3句、同人作品4句と共に、「万象作品」より4句掲載。

草叢は大き虫籠すいつちよん　内海良太
淋しさに鴨が声出す橋の下　内海良太
よく弾む木の実文明開化の地　内海良太
月光のにほの芯まで及びけり　大内和憲
米磨ぎの掌に新米の重さかな　大村かし子
籾殻を焼いて一村煙らせり　澤　照枝
節穴より菊のかをりや長屋門　古川京子
まづ天にラジオ吊して松手入　田上幸子
鬼を待つ釣瓶落しのかくれんぼ　島崎　洋
雲湧けり九月は雲の展覧会　山本瑤子
新じやがのゑくぼ十勝の土黒き　園田鶴子

「万象」三月号の主宰句3句、副主宰句2句が、「森」六月号の「現代俳句合評」に。3句について川原とし江氏の鑑賞を紹介。

見上げてはまた蘆刈の刈り進む　内海良太

晩秋から冬にかけて刈取られる蘆は屋根に葺いたり葭簀の材料にする。丈の高い根元の方を刈る為の作業に時折腰伸ばして見上げる空は広々と清々しい。

葱さげて礼拝堂に一礼す　内海良太

畑の帰りであろうか、何本かの葱を手に礼拝堂に一礼、洒落た洋館と葱との取合わせの妙（意外性）に魅かれるがそうした行いが自然にできるお人柄にも敬服する。

短日や忘れ帽子が玄関に　小林愛子

短日の薄暗くなった玄関に忘れられた帽子、急いで帰られたお友達の帽子でしょうか。秀れた一枚の写真か、映画のラストシーン、モノクロームの世界を活写。

「万象」五月号の主宰句、副主宰句が、「春耕」六月号の「鑑賞『現代の俳句』」に　蟇目良雨氏が鑑賞。

春炬燵蕪村の恋のはなしなど　内海良太

〈前略〉蕪村の書簡には娘のことや芸妓小糸のことが出てくるが、根がまじめな蕪村にとって本気の遊びはなかったと私は思っているので作者がどんな蕪村の恋の話をしたか興味がある。蕪村、春炬燵、恋と舞台は揃っているのだが、芭蕉ではこんな句は出来ないのは、蕪村は純粋の町人、芭蕉は武士上がりというところにある。

豆打つてベテルギウスを探しをり　小林愛子

前書きに「ベテルギウス異変・オリオン座崩れる？」とあるので、ベテルギウスが超新星爆発の直前に暗くなっていることに興味を惹かれて一句が成った。「乾坤の変は風雅の種なり」（芭蕉）を持ち出すまでも無く、俳人は何にでも興味を持ちたい。

長崎支部より

長崎鳴滝句会の作品は、発足当時から、他の結社と共に長崎新聞文芸欄に、隔月で掲載されていた。「万象」長崎支部が昨年の大会で発足したので、一月から毎月、「万象」誌に載った全会員の句が掲載されることになった。会員の吉牟田陽子さんは十月号の投句を目指している。

冬霞島の空港おほひたる　丸本祥夫
ストーブや犬を枕に眠る猫　永田美知子
寒行の極めつくせり大音声　下見直哉

（報・江見悦子）

（この線より切り取ってください）

令和二年

万象作品

十二月号

（九月十五日締切）

（句の表記は歴史的かなづかいで）

都または市・町・村名	
ふりがな	
姓　号	
年齢	

送り先　〒166－0003　東京都杉並区高円寺南3－52－8　藤田裕子

新規会員を紹介します
姓　　号
郵便番号　〒
住　　所

投句者住所　〒

投句者姓号　　電話

あとがき

▽今月号のハイライトは、第18回「万象」新人賞の発表です。久しぶりに北海道から新人が誕生しました。いわゆるコンクールでもある万象賞と違い、1年間に亘る日々の作句の集大成が評価されたもの。受賞者は勿論のこと、句会の指導者やお仲間にとっても誇るべきことと思います。

厳しい朱夏の季節、大きな自然災害が起こらないことを祈ります。皆様どうぞお大切にお過ごし下さい。（江見）

▽句会会場の公民館の閉鎖が解け、四ヶ月ぶりに句会が行われました。俳句は座の文芸と言われます。句友が集い、自由に批評しあう喜びを味わうことが出来ました。句の善し悪しはともかく、充実した半日でした。（茂）

▽地元にいる俳句仲間とネットやLINEで俳句のやり取りをしています。兼題の句について、ああでもない、こうでもないと書き込みをしながら、それを参考にして一句にまとめていきます。芭蕉や蕪村もこんなふうにやっていたのかなあと思いながら。（千久）

▽コロナ禍の続く中、猛暑との戦いにも気が抜けない日々です。秋の全国大会の中止が早々に決められた事は、正に「万象」の英断でした。（規子）

▽古代、団扇は扇ぐ為の物と云うより、魔を払う道具。今年の夏はマスクをし、身辺に蚊取線香を燻らせ、団扇を大幣代りに捧げ持ち、コロナ祓えと行きましょう…か。（英俊）

▽今月で「文学散歩」は最終回。埼玉の文学性溢れる土地柄を堪能させられる、締め括りにふさわしい内容です。長年文学散歩に投稿下さった方々に深く感謝申し上げます。（純）

▽「コロナ禍の中で」を担当させて頂き、全国14の支部・代表の方々から素晴らしい原稿をお寄せいただきました。俳句に対する真摯さと情熱が、ひしひしと伝わってくる、楽しい編集作業でした。心から感謝申し上げます。

ありがとうございました。（郁代）

会員を募ります

会員は左記の会費（誌代）を前納していただきます。

半年分　六、〇〇〇円
一年分　一二、〇〇〇円

会費の納入は左記の振替をご利用ください。新会員は必ずその旨明記。

郵便振替口座　〇〇二三〇・〇・一〇三五八一
万象俳句会

住所変更等　住所変更、会費納入、退会等については左記にご連絡願います。

〒二八五・〇九二二
千葉県印旛郡酒々井町中央台1-17-12
竹澤誠治

万象　八月号

第十九巻　第五号
通巻　第二二一号

令和二年八月一日　発行

主宰　内海良太
発行人
編集人　江見悦子

〒168-0072
東京都杉並区高井戸東一-三一-六-603
万象発行所
☎〇三-六三三四-五七九六

印刷・有文社（☎042-475-0436）

万象
第十九巻 第五号（通巻二二一号）
平成十四年十一月十三日 第三種郵便物認可
令和二年八月一日発行（毎月一回一日発行）

榴くん七歳の夏